

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



Vol. 9

平成14年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 洞澤佳廣 宇仁健一郎 内田輝昭
印刷 (株)エイコープリント

会長 年頭のご挨拶



阿部 博男

同窓生の皆さん、明けましておめでとうございます。二十一世紀、二度目の新年を迎えました。皆さんはご家族と共に、或いは、単身世界的に広がった勤務地で、新たな考えを持って、この新しい年を迎えられたことと思います。

今年は、私どもにとり母校防衛大学校が創立五十周年を迎える歴史的に意義の深い年でもあります。公式記念行事は十一月十七日、日曜日に執り行なわれる予定です。

私も同窓会、その前日十一月十六日土曜日に、この春竣工する記念講堂で講演会と祝賀会を実施することで準備を進めております。多数の同窓生の参加をお待ちします。

それまでに、同窓会として、記念講堂正面にステンドグラスを、図書情報館中央に彫刻像を創立五十周年を記念して寄贈することとしております。その他各種の事業を含めて同窓会の記念事業は、全て平成七年十一月、同窓会総会の決議で設置した五十周年記念事業委員会の周到な準備によるもので、七年間に渡る佐久間委員長始め二十数名の委員の献身的な活動に対して深く感謝と敬意を表するものであります。

また、五十周年事業に賛同戴き、募金に応じて下さった同窓生の皆さん方に厚く御礼を申し上げます。

わが国では、十年一昔と言われています。十年経つと、物事が変わってしまうことを表しております。冷戦が終結して、早くも十年経ってしまったことを考えると、この格言のように、今日の世の中の変化は、一桁の期が現役であった時代には考えられないようなことが起きており、その激しさには驚かされるばかりです。

例を上げますと、昨年十月、参議員テロ対策特別措置法案の審議の過程において、総理は「従来、備えるから憂いが生ずる」ということで議論を避けてきたと述べております。しかし、どうもそうではないことがこれまでの経験から分かってきたので「憂いの恐れのあることには備えなければならない」と方向

転換を明言しております。

この議論の主体は防衛問題です。縄を編うから泥棒が生まれるのだとする防衛論議は、占領下、そしてその後も、これまでの主流でした。それが、先に縄を編っておこうという変化をしたのです。

この変化をもろに受けて準備をするのは、私たち防衛大学校の同窓生であると言っても過言ではないでしょう。この方向転換は大きいのです。これまでの自衛隊で私たちは、縄を編う必要性を訴え続けてきたのですが、政治的配慮でそれを受け入れることに踏み切ってもらえなかったのです。創設以来、言い続けてきたことが聞き入れられるようになった今、その必要性を同窓生が切実に感じているのではないかと恐れるところです。国民が、政治を通して縄を編うように要求した時、十分にそれに応える事ができないとすれば、防衛大学存立の是非を問われることになることを覚悟しなければならぬといえましょう。現役同窓生の活躍を大いに期待するところです。

四十年前、同窓会の設立が論ぜられたとき、卒業生の消息の把握、校友会の援助等その必要性にあわせて、防大関として指導されることなく三自衛隊統合活動の推進力となることが期待されました。同窓会は、本来この様に、わが国の安全保障上、必要欠くべからざる課題を負う事になっているのです。このことは防衛大学校同窓会以外何人も負うことができないことなのです。特殊な同窓会であると言えましょう。

と同時に、この重要な課題をどの様に果たすかという点、同窓生相互の交流による意思の疎通がその基盤であると考えます。それも、同じ学校で教育を受けたというだけでは十分といえず、自衛隊の現場を経験し、それを踏まえて相互に理解しあうことがその上に要求され、次の段階として重要になってくるのです。同窓会活動は、このような人間関係構築の場を提供できるものとして活用願いたいと考えます。

昨年夏、遠洋航海部隊がタイに寄港した時、タイ防大同窓会が創立五十周年記念と銘打って、わが国と縁の深い陸海空高官、留学経験者及びその家族を含めて一〇〇名余が待ち受け、歓迎の宴を開いてくれたとのことでした。同窓生の活動が、国際的な広がりを持つようになってきたことに喜びを得ません。このような話題が寄せられるにつけ、地域、引いては世界の平和と繁栄に関わりをもつ重大な責任を私たちに課せられていると感じる次第です。

防衛問題がわが国にとって、如何にとらえるべきか真剣に議論が始まり、また周辺諸国からもその姿勢に関心を持たれるようになってきている昨今、一方では、徒に無関心を装っている同窓生が散見されるのは残念なことと言わなければなりません。私たちは全同窓生に対して、今後とも同窓会として責任を果たしていくつもりでおりますが、同窓会を外から見た場合、同窓生の纏まりこそが同窓会の評価に繋がることを心に留めて頂きたいと思っております。同窓生の皆さんは、物事に積極的に取り組み、それを解決する当事者としての自覚を持ち、防衛大学校出身者であることに誇りを持てるように、同窓生一同一丸となつて努力して行くことはありませんか。

昨年の一年と一昨年の一年とを比較して見ますと、この一年は、その変化が多岐に渡ることとその激しさに驚かされます。任務の多様化、テレビ出演を含めた活動範囲の広がり、それにも増して同窓生の長官、しかも二四期生を戴いたこと等は一昨年には思いもよらなかったことで、同窓生の活躍の場は予断を許さぬ程、広く、深くなっています。今こそ、同窓会を意思疎通の場とし、これまでに考えたことや経験したことを知恵として、国民の負託に応えるよう皆さんの活躍を期待して新年の挨拶と致します。

終わりに、同窓生各位並びにご家族のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

同窓会記念事業について

記念事業委員会

一 全般

平成十三年は、積年に亘って同窓生の皆様にご協力をお願いしてまいりました募金活動が無事終了し、記念事業に必要な募金目標を達成することができました。

また、委員会としては、これまで鋭意検討してきました事業等を「防大創立五十周年同窓会記念事業実施計画」として纏め、平成十三年十二月七日の代議員会において、その全体計画を報告し承認を得ました。昨年の「小原台だより」で報告致しましたステンドグラスの原画制作者の問題も、多摩美術大学教授平松礼二画伯（二十一世紀に活躍が期待される画家として、その作品が昨年一月から月刊誌「文芸春秋」の表紙を飾っています。）が、従来の経緯を承知されたうえで記念事業に対する協力を快諾して戴きました。原画は昨年七月に完成し、現在これに基づくとステンドグラスを制作中であり、本年三月の卒業式までには防大の記念講堂正面に設置される予定です。

平成十四年は、いよいよ防大も創立五十周年を迎え、記念事業を完遂する年になります。この実施計画を準拠に、今後、同窓会本部と記念事業委員会が一体となって記念事業の実現に取り組んでまいりますので、同窓生各位の一層のご理解と、ご協力をお願い申し上げます。

二 募金活動の最終結果

平成九年六月に開始しました募金活動は、

平成十三年七月二十七日をもって終了しました。

その結果、同窓生等七六九七名の協力を得て、総額一億二千五百四十四万円の募金を得ることができました。この成果は、同窓生各位の母校への限らない愛着と感謝の気持、並びに二十一世紀に飛躍する後輩への強い期待の現われであると、委員一同、真摯に受け止めております。この中には、募金目標を是非達成できるようにと多額の浄財を寄せられた同窓生や、殉職された同窓生の御家族からの募金があったことを申し添えておきます。

この募金総額から郵便局の振込手数料四十七万円を差し引いた一億二千二百七十四万円を事業経費に充当して、記念事業を実施することになります。なお、ご協力戴いた募金者の皆様の氏名は、期別に整理し、「防衛大学校創立五十周年記念事業同窓生募金者芳名録」として母校に遺すことに致します。

三 「防大創立五十周年同窓会記念事業実施計画」の概要

(一) 全般構想

① 記念事業の計画当初から会報を通じて説明してきましたとおり、事業内容は後世に遺す価値あるものを重点とし、また記念事業の計画、実施に当たっては、二十世紀後半の歴史を踏まえつつ二十一世紀に向けての飛躍を基本理念としております。

② 記念事業の実施については、同窓会本部及び防衛大学校と密接に連携を図りつつ、事業を計画的、かつ整齊と推進することの方針とし、また次を重視事項としております。

ア 記念事業の柱であるモニメント事業の円滑な推進

イ 同窓会記念行事の周到かつ計画的な準備と実行

ウ 広報、特に会員の同窓会記念行事への参加意識の高揚

③ 同窓会記念行事に関しては、同窓会本部と事業委員会との事業担任を明確にするとともに、防大、同窓会本部及び委員会にて記念行事に関する調整会議を設置して行事の円滑な準備と実行を図ることにしております。

(二) ステンドグラス

原画のタイトルは「若人の城」とし、その構図は、守るべき対象である日本のシンボルとしての富士山と、陸・海・空を示す「咲き誇る桜」「金色に輝く海」「紺碧の空」を描き、全体として国を守る若人の城としての小原台の場を表わすものとなっております。

(三) 中央広場の彫刻像

中央広場に、愛知芸術大学教授 高橋洋氏の制作によるブロンズ像を、本年九月に設置の予定です。

彫刻像のタイトルは「国の護り」とし、陸・海・空及び学生綱領の「廉恥、真勇、礼節」を表わす三本の柱で、武の象徴にして頭脳（知恵）を守る「兜」を支え、全体として防大生のあり方を表現するものとする構想です。

④ 顕彰室・資料館の整備支援
資料館の顕彰室に御影石プレートに殉職同窓生の刻銘板を寄贈・設置するとともに、卒業生コーナーに必要な備品を寄贈する事業を計画しています。ただし、防大の顕彰室・資料館整備が当初計画の平成十五年度から平成十六年度に変更されたため、これらの事業の実行体制は同窓会として別途検討することになっております。

目次

会長年頭のご挨拶

同窓会記念事業 1

防大特集

小原台は今 6

防衛大学校の訓練の概要と現状 6

第7回国際防衛学セミナーについて 7

校友会活動状況 8

特別寄稿

UNDOFに参加して 9

タイ王国防大卒業生との交流について 9

同窓会行事

第5回期別対抗ゴルフ大会 11

第4回防衛大学校同窓会テニス大会 12

第3回期別対抗囲碁大会開催 12

顕彰碑献花式 13

同窓会費納入状況に大異変！ 13

同窓生アカルト 14

期生会だより

第2・5・6・7・8 20

13・14・15・17・25・35期 20

支部だより

沖縄・九州・関西・北海道地域支部 25

タイ・広島地区支部・小原台クラブ 29

会計報告

また、防大当局が編纂する五十年史に関連して、防大の要請に基づきブックレットを作成する予定です。

(五) 記念ビデオの作成

卒業生の思い出の記録として、記念ビデオを本年十二月までに作成する計画です。タイトルは、「任重く道遠し（小原台を駆け上った若人）」とし、構成は、防衛大学の誕生、防大生の生活、防大五十年の回顧、創立五十年記念行事、現在の学生生活及び同窓会活動等とし、BGMとして記念マーチも取り入れることにしています。ビデオの作成に当たっては、シナリオ作成について六期生桑原泰彦会員の、編集支援について陸自OB久保田博幸氏の協力を得ております。

本年十一月の同窓会記念行事の際には準完成ビデオの試写会を予定しており、また本年十二月の代議員会及び明年三月の総会において、完成ビデオの試写会を実施することも考慮しております。

(六) 記念マーチの作成、贈呈

防大生の観閲行進及び課業行進の際に使うことを目的として複数の記念マーチを作成し、本年十一月の同窓会記念行事の際に防大に寄贈する予定です。この事業は、防大吹奏楽部OB会が主体となって計画を進めております。

既に民間音楽家三名に作曲を依頼したほか、昨年十二月までに一般及び防大OB・学生から募集した作品を部門別に数曲選考したうえで、最終審査を本年四月から六月の間に防大で実施して贈呈する行進曲を選定し、記念行事の際に正式に披露することにしております。

(七) MCI (Military Cyber Institute) 構想の策定

昨年の「小原台だより」による報告の中で、人材活用機構としてサイバー・インスティテュートの創設を検討していることをお知らせしました。その後、委員会として検討を重ね

た結果、防大創立五十周年を記念し百周年に向かう植樹として、同窓会にMCI（仮称）を設立する基本構想を策定し、事業化のための具体的な提案書として、本年十一月の記念行事において同窓会に提案する予定であります。

MCI構想の最も基本的な狙いは、全国に分散居住している同窓生各位が在職間に培った貴重な経験に基づく専門的な識見を結集して、その能力を最大限に活用していくことにあります。すなわち、公開された一般情報を分析・蓄積して軍事に関する諸情報を発信する機構を、同窓生による手作りで設立しようという構想であります。委員会は、この分野に造詣の深い十数人の同窓生有志の協力を得て検討チームを編成し基礎的な研究を開始しています。一方、このような提案は、同窓会に対し、今後の同窓会のあり方や運営に大きな転換を求めることにもなります。したがって、昨年十二月の代議員会では、委員会に対して同窓会の判断に資するような具体的なMCI提案書の作成及び同窓会への提案を承認するとともに、同窓会にも検討プロジェクトを充足させMCI機構設立の可否及び同窓会のあり方について検討を進めていくことになりました。同窓会各位の皆様には、委員会の考え方について更に理解を深めて頂くために、先の代議員会にご報告した「MCI趣意書」と「MCI構想推進の全体的枠組」を別項に掲載しておりますので、ご精読下さい。

(八) 記念行事

防大創立五十周年記念行事は、例年開校祭が行われる時期すなわち本年十一月に開催されることになりました。具体的な日程は、十一月十六日（土）が同窓会記念行事、十七日（日）が防大の公式行事であり、学生主体の行事は十四日（金）からの四日間の実施が予定されています。

同窓会記念行事の内容は、慰霊碑献花式、記念講演会、記念ビデオ試写会、ステンドグラス・彫刻像の制作過程作品の展示並びに記念祝賀会（同窓会本部が計画実施し、記念マーチの贈呈・披露、記念ビデオの贈呈、醗金者名簿の贈呈、MCI企画書の提案等を含む。）であり、いずれも防大校内で行われます。

記念講演会の講師については、三浦朱門氏の快諾を得ました。なお講演録は、平成十五年一月発行予定の「小原台だより」防大創立五十周年記念特集号に掲載することにしてあります。また、同窓会各支部が計画実施する記念講演会等に対して、可能な範囲で必要な資金を援助する予定であります。

記念行事の案内状は、本年八月頃までに同窓会全員に対して送付することにしてあります。

(九) 醗金者に対する小記念品の贈呈

記念事業醗金者全員に対して、小記念品として記念ビデオ並びにモニメントの絵葉書セット（モニメント説明文、記念講堂及び中央広場全景写真、ステンドグラス写真、彫刻像写真）を、明年三月頃を目途に送付することにしてあります。

なお、防大の要望に基づき、モニメントのパンフレットを本年十一月までに作成し、防大に贈呈致します。

(十) 経費計画

平成十年の代議員会において、総額一億二千万円の記念事業予算と事業項目別の予算枠について承認を得ました。その後、計画の進捗に伴い明らかになった具体的な所要経費について、昨年十二月の代議員会において承認されました。その内容は次のとおりであります。

- ① モニメント …… 五千万円
- ステンドグラス …… 二千七百五十万円
- 彫刻像 …… 二千二百五十万円
- ② 顕彰室、資料館、記録 …… 二千七百万円
- 顕彰室 …… 一千八百万円

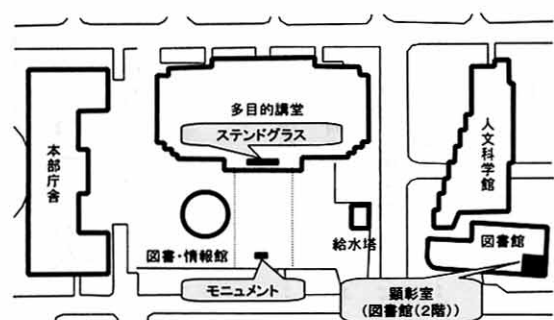
- 卒業生コーナー …… 三百万円
- ブックレット …… 百万円
- ③ 記念ビデオ …… 五百万円
- 記念行事等 …… 一千四百万円
- 記念講演会（支部講演会を含む。） …… 一千万円

- ④ 記念マーチ …… 四百万円
- MCI構想 …… 五百万円
- ⑤ 醗金者対応 …… 九百五十万円
- 醗金者名簿 …… 五十万円
- 小記念品 …… 九百万円
- ⑥ 予備経費 …… 一千五百五十七万円
- 所要経費総計 …… 一億二千六百七十七万円

(十一) 実施結果の報告及び記録

記念事業の中間的な実施結果を、記念行事終了後の本年十二月の代議員会及び平成十五年三月の総会で報告するとともに、記念事業全般についての最終的な報告は、委員会としての任務が終了する平成十五年六月頃に行う予定にしております。

また、記念事業に関する委員会の活動経過を記録として整理し、同窓会本部に永久保管することにしてあります。



MCI構想(仮称)趣意書

平成十三年十二月七日

一 本構想提案の背景

防衛大学校(防大)は、創設以来、いまや半世紀の歴史を重ねるに至りました。その卒業生は、第一期生から第四十四期生まで約一万八千名を越え、自衛隊および一般社会で大いに活躍しています。一方、自衛隊の幹部は防大卒業生のみで構成されていないことから、現役の間は防大卒業生のみによる同窓会活動は意識的に抑制すべき側面があることも否めません。

したがって、防大同窓会の活動は、主として既に退官した者が中心となつて防大校友会の活動に対する補助や会員相互の親睦事業を行ってきました。しかしながら、退役した防大同窓生の数が増大するにつれて、これまでの活動以外にも何か社会的な貢献をなすべき時機、すなわち社会に対する「発信力」を持つべき時機がきたのではないかという意見も、一部から出るようになりました。

その最初の動きが、平成六年に発足した「同窓会将来構想委員会」であり、この委員会に於ける審議を通じて、会則の改正、財政運営、事業の推進についての概案を得るにいたりしました。しかしながら、全事業にわたって更に詳しい検討が必要との認識から、引き続き約一年間にわたり「事業推進委員会」で検討を重ねた結果、短期及び中長期の事業案として同窓会に答申され承認を得る運びになりました。「短期の事業」としては、支部育成、ホーム・カミングデイ、学生の悩み相談等を行うこととし、「中長期的な事業」としては、「同窓会として何らかの社会的貢献を行うこと」、「OBの連携をさらに深めること」等で、

じつ同窓会として計画的に取り組んでいくことになって今日に至っております。

ここに提案するMCI構想(細部は後述)は、五十周年記念事業の一つとしての提案ではありますが、「同窓会員を繋ぐネットワークを構築する」、「同窓会員の各種能力を総合して活用する」、「わが国における防衛問題の正しい位置づけに寄与する」等を柱にしているもので、近い将来、前述の事業推進委員会が提案した「防大同窓会の中長期的な活動計画」の推進につながる可能性を持ったものであります。

二 五十周年記念事業と本構想の関係

防大五十周年記念事業を立案する初期の段階では、「募金の規模」、「五十周年記念事業のあり方」、「寄贈事業(ステンドグラス、彫刻像、顕彰室等)」、「記念行事事業(講演会・行進曲・小記念品・記念ビデオ・募金者名簿など)」について鋭意具体化を進めてきました。これらの各計画が着詰まる段階で、何か前述の「防大同窓会の中長期的な活動計画」に結びつく事業、すなわち「記念植樹の苗木」に当たるようなものを加えてはどうか、との提案が委員の中から出され、委員会で審議検討の結果、MCI構想こそ、五十周年という節目に記念植樹の意味合いで発足させるにふさわしい事業ではあるとの合意に達しました。しかし、MCI構想の取り扱いが、事後の同窓会の「長中期的な活動計画」に大きく関係することから、五十周年事業委員会としましては、募金の一部を充当して、実行に移すために必要な具体的構想、即ち「趣旨」、「手順」、「組織」、「技術的な試行」、

「経費見積」など、実行可能性の細部事項を含む「提案書」を完成させて同窓会に提案することとし、じつこの取り扱いには同窓会代議員会において検討して頂くことにいたしております。

三 MCI構想の趣旨

わが国の国家運営では、政治・経済・外交・安全保障(以下、本文では軍事と表現する)の四本柱のうち、何か物事を決めるに際して、軍事的視点が抜けていることが多々あります。これには幾つかの原因があると思いますが、その一つは、軍事に関する知識や体験が整理総合されていないため、軍事的視点からの考察をすることが難しいことにあります。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的視点が整理総合されているセンター」が無いために、どうしても軍事的な視点が疎かになっています。現在、意ある者が中心となつて運営している軍事・防衛の課題を中心にした研究所も幾つかあつて心強い限りであります。が、それぞれが研究の基礎となる意見を整理総合する段階で多大の時間と労力を必要とすることから、研究そのものに充当する時間や労力が不足する共通の問題に直面しています。もし、このようなセンターが設立されれば、これらの各研究所も資料を効率的に整えることが可能となり、一挙に研究効率を上げることが可能となります。

他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、意識的に軍事的な思考を排除する傾向さえあります。

反対に、これに気がついていいる政治家、財界人、外交官も多いのですが、自分の力で軍事・防衛に関する意見を整理統合する余裕がないのが現状であります。

ここに提案するMCI(Military Cyber Institute)構想は、未だ仮称であつて実行に

移される場合には、さらに理解し易い名前(例えば、防衛情報機構、DIO)等に変えるべきものであります。ここでは便宜上MCIと呼ぶことにします。

このような軍事・防衛に関する意見を整理・総合できるセンターの設立が必要であることの認識はありますが、現実これを立ち上げるとなると、二つの大きい問題を克服しなければなりません。

第一は、わが国でも最高レベルの軍事知識や体験を持った者が結集することであり、

第二は、立ち上げるための組織と当面(おそらく二〜三年)の運転資金を準備することであり、ある程度の年月の継続した実績がないと、官公庁や産業界や研究所等から「運転資金」に見合うだけの「資料提供料(委託料)」を得ることは難しいことです。

まず、第一の問題は、防大同窓会会員の知識を集めて立ち上げるのが一番の早道といえます。これに勝る母胎が日本には無いからです。防大同窓生の力を結集してもそれが出来ないとなれば、日本に出来る集団はないといえます。もちろん、発足後は、防大同窓生以外の者の参人も視野にいれておく必要があります。

現在、軍事の各部門で重要な意見を身につけた同窓生が日本全国に散在して、それぞれに活躍していますが、それらの意見が結集され、総合化されていないのが実情です。各同窓生が自分のカバールでできる意見を予め登録してセンターに集め、センターの専任員がこれを組織化し、各分野からの資料要求に応えられる態勢をとることがMCIの具体的なイメージといえます。

これからますます発達するコンピュータ・ネットワーク技術を活用して迅速に情報を交換し、各種の情報を集積・分析・加工して付加価値を付けること等によって、MCIは防衛に関する高いレベルの識能を結集し、

国の内外に安全保障関連の役に立つ情報や仕事を提供し、同窓会はこのことを通じて大きい「発信力」を持つことができるようになることを確信します。

第二の問題は、MCIは営利を目的としたものではありませんが、最低限、運転に必要な収入を得る必要があります。同窓会からの資金だけを当てにするようでは長続きしないし、同窓生の賛同や協力は得られないと思います。

しかしながら、発足当時から、それに見合う収入源を他から得ることは難しいことも事実です。各界に呼びかけて設立と運転のための資金提供を受けるのも一案ではありますが、これも現今の情勢では難しく、また情報分析の独立性を確保するためにも、できれば避けた方が賢明であります。

同窓会がMCI構想を採択するか、採択すればどのような位置づけにするかは、これから同窓会が決める問題であります。営利を目的としないことや、特定の業界や官公庁との結びつきを持たせないことを考えますと、「NPO法人」として防大同窓会の下部組織とするのも有力な一案といえます。どの程度の資金を、どの程度の期間にわたって投入すれば、同窓会の「負の荷物」にならないかについては、その検討結果を「提案書」に記す予定であります。

いずれにしても、何事も見通し通りにいかないリスクは存在します。その場合、提案書の作成経費や当初の二、三年の準備段階での経費投入は無駄となり、最悪の場合、防大同窓会の電子ネットワークだけが残ることになってしまうかもしれません。しかしながら、母校創立五十周年の節目に、同窓会の存在意義を高めるためにチャレンジする価値のある事業を創造し、同窓生の英知を結集して取り組んだということは、防大同窓会の歴史の中で価値あることと考えられないでしょうか。

MCIは五十周年記念事業委員会としての

一提案に過ぎず、委員会としましては、必ずしもMCIの設立に固執しているわけではありませぬ。しかし、これが出来ないとなると、これから先、どのような形で同窓会活動を意義あらしめるのか、同窓会としての「代案」を明らかにする必要があります。これからの五十年間を、今までのように会員の親睦を主とした任意団体として存在し続けることが、祖国防衛に生涯を投じて燃えた防大同窓生の同窓会として相応しいことなのでしょう。五十周年を迎える今こそ決断する時機ではないでしょうか。

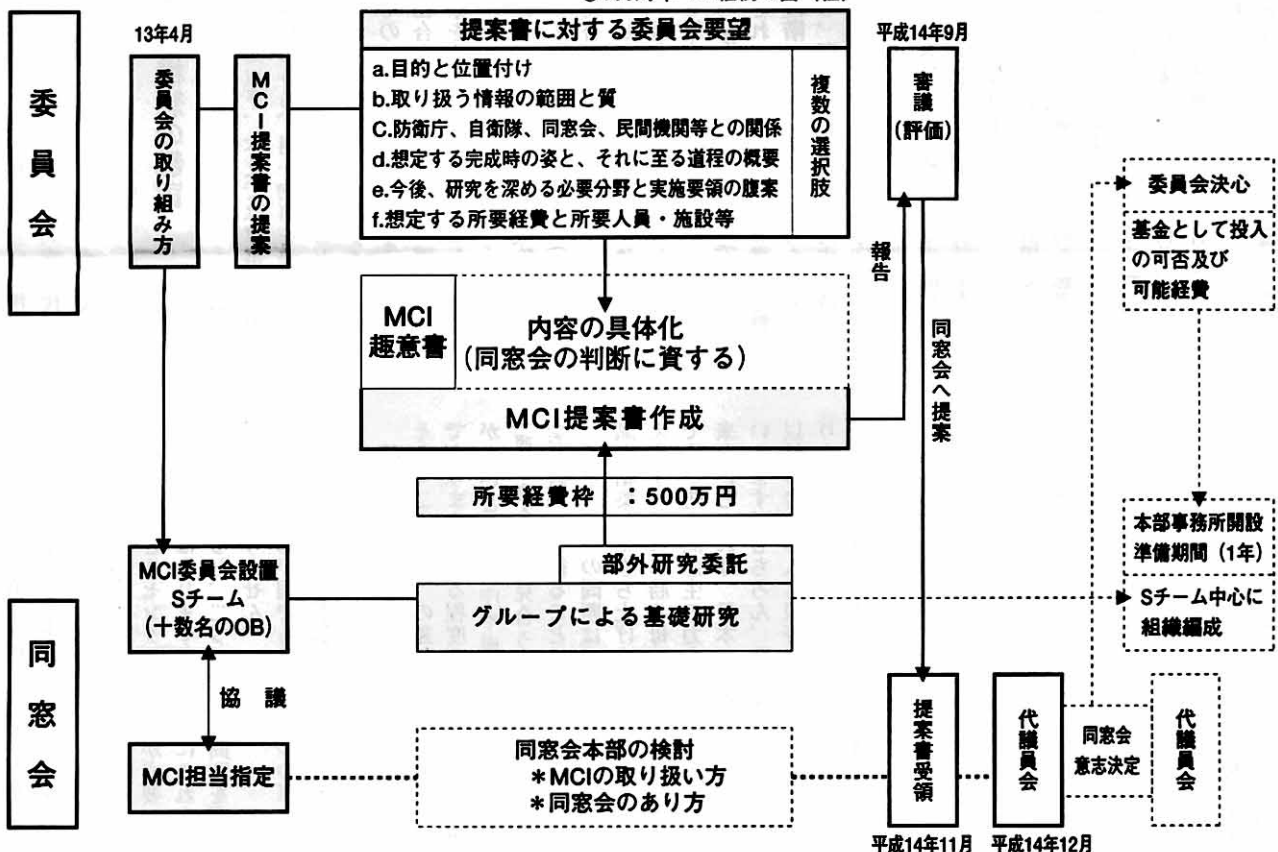
創始者である防大第一期生が同窓会をリードしている五十周年の節目のいま、防大同窓会の中長期ビジョンが出来ないとなれば、いつ、何を契機に、他の誰にそれができるのでしようか。

MCI構想を何らかの形で発足させることが出来ますよう、同窓会員の皆様の御賛同を是非頂きたいものです。五十周年の節目に、百周年に向かう植樹として、このMCI事業を推進することは、防大同窓会にとり、「軍事抜き日本国」を「軍事も考え合わせる日本国」にするためにも、極めて重要な一歩を踏み出す一助となると確信します。



MCI構想推進の全体的枠組み

◎100周年への植樹の苗(種)



防大五十周年記念事業募金状況

(平成13年11月30日現在)

期	対象者数	募 金 者 数					募金額 (×1000円)
		陸	海	空	合 計	応募率%	
1	299	152	62	47	261	87.3	5,900,000
2	308	150	53	46	249	80.8	5,320,000
3	447	161	57	93	311	69.6	6,780,000
4	419	154	50	77	281	67.1	5,720,000
5	491	136	51	75	262	53.4	5,490,000
6	427	126	63	89	278	65.1	5,840,000
7	419	133	58	58	249	59.4	5,195,000
8	414	111	45	60	216	52.2	4,250,000
9	424	107	57	61	225	53.1	5,280,000
10	442	118	53	63	234	52.9	4,090,000
11	462	135	57	57	249	53.9	4,185,000
12	417	102	48	59	209	50.1	2,790,000
13	403	105	41	60	206	51.1	2,500,000
14	461	121	67	87	275	59.7	3,147,000
15	401	129	57	57	243	60.6	2,640,000
16	402	111	38	61	210	52.2	2,405,000
17	455	114	58	57	229	50.3	2,445,000
18	399	92	58	54	204	51.1	2,195,000
19	413	133	37	55	225	54.5	2,420,000
20	356	89	46	41	176	49.4	1,830,000
21	465	92	58	47	197	42.4	2,135,000
22	431	85	68	39	192	44.5	2,014,000
23	378	103	34	40	177	46.8	1,935,000
24	417	79	46	31	156	37.4	1,809,027
25	374	79	47	34	160	42.8	1,695,000
26	469	87	64	45	196	41.8	2,040,000
27	364	54	70	36	160	44.0	1,760,000
28	403	64	47	38	149	37.0	11,665,000
29	414	74	39	29	142	34.3	1,475,000
30	369	53	41	29	123	33.3	1,340,000
31	396	57	37	32	126	31.8	1,300,000
32	334	55	24	32	111	33.2	1,170,000
33	378	80	27	30	137	36.2	1,425,000
34	354	57	21	50	128	36.2	1,357,000
35	439	58	28	30	116	26.4	1,271,000
36	340	33	21	28	82	24.1	880,000
37	366	35	22	27	84	23.0	895,000
38	425	37	20	30	87	20.5	960,000
39	338	51	22	32	105	31.1	1,070,000
40	376	27	14	46	87	23.1	885,000
41	403	96	42	30	168	41.7	1,515,000
42	407	15	3	4	22	5.4	220,000
合 計	16,899	3,850	1,851	1,996	7,697	45.5	121,238,027

勝田 支部						185,258
府中 支部						103,634
稲森 友三郎						10,000
本橋 昇司						10,000
総 計						121,546,919

小原台は今

●防衛大学校の訓練の概要と現状●

一 訓練の体制とスケジュールの概要

(一) 訓練の体制

防大における現在の訓練の体制は、首席指導教官、次席指導教官及び指導教官がそれぞれ訓練主任教官、訓練主任教官補佐、及び訓練教官として学生の訓練に当たっている。また、一学年の共通訓練及び二学年以上の陸・海・空の要員訓練にそれぞれ首席指導教官をもって訓練のための組織を編成するとともに、学生は各学年十六個の班に区分して訓練を実施している。

(二) スケジュールの概要

ア 訓練課程は、四年間で一〇〇五時間の訓練を実施している。学年別にみると第一学年は、陸・海・空各要員に共通した訓練を主体に実施し、第二学年から第四学年は、陸・海・空各要員別の専門訓練を実施し、卒業後の陸・海・空各幹部候補生学校における訓練課程に接続したプログラムとなっている。

イ 各学年ごとの一年間の訓練課程は、課程訓練と定期訓練に区分して実施している。

(ア) 課程訓練

課程訓練は、第一学年及び第二学年においては、毎週一回、第三学年及び第四学年においては、隔週に一回いず

れも午後の二時間を充当している。また、課程訓練週間実施予定表により、各訓練班に訓練科目及び時間を割り当て、第一学年及び第二学年においては前期十五週、後期十五週の計三十週（六十時間）、第三学年及び第四学年においては、前期八週、後期七週の計十五週（三十時間）の訓練を実施している。

(ア) 定期訓練

定期訓練は、春季、夏季、秋季及び冬季定期訓練に区分し、各学年年間約六週間実施している。定期訓練は、課程訓練に比較して期間も長く、かつ集中的に訓練が実施でき、訓練効率の高い訓練である。定期訓練において実施する科目は水泳（遠泳をふくむ）、スキー、野営訓練、部隊実習及び陸・海・空各自衛隊研修等である。

ウ その他

訓練関係行事として、体力・気力の養成と団結の強化を狙いとして、カッター競技会（四月・第二学年）、水泳競技会（九月・全学年）、棒倒し競技会（開校祭十一月・全学年）、断郊競技会（十二月・第三学年）、持続走競技会（三月・第四学年）、及び教務部（体育学教室）が担当する体育競技会（十二月・全学年）の各競技会を実施している。また、指揮能力及び基本教練の練度向上を図る目的として、年間三回の観閲式を実施している。また、三年に一回実施される自衛隊記念日観閲式に第二学年以上の学生をもって参加している。

二 訓練の現状

(一) 共通訓練

ア 共通訓練は、陸・海・空各要員に共通する訓練として、訓練課程一〇〇五時間のうちの四〇六時間（40%）を充当している。これは、平成八年度に訓練科目表を見直し、特に専門訓練及び陸・海・空各幹部候補生学校との接続を考慮した科目の精選及び時間配当を行った結果、従来の四三六時間から三十時間を削減したものである。

イ 共通訓練の訓練科目及び時間配当は、共通補導一〇四時間、基本教練二十時間、戦技基礎一六九時間、富士登山七時間、教育法三四時間、部隊研修等五九時間及び異動・予備三時間である。将来幹部自衛官としての資質の向上、識能育成上必要な基礎的訓練であり、陸・海・空各要員間の相互理解を深めることを目的として、主として第一学年に二五五時間（共通訓練の55%）を実施している。

ウ 訓練の実施にあたって各訓練教官は、基本を徹底して指導し、要員訓練の基礎を築くとともに、陸・海・空共通マインドの育成を図るため、偏りのない指導に留意している。また、良識ある社会人としての徳操及び将来幹部自衛官としての積極敢為の気風、リーダーシップの基礎、フォロアーシップ、規律心、団結心、及び闘争心の育成を図るとともに、幹部自衛官に相応しい挙措容儀及び基本教練に示す諸制式を確実に行うことに留意して訓練を実施している。

(二)

専門訓練

専門訓練は、陸・海・空各要員別の訓練であり、第二学年以上に実施している。訓練課程一〇〇五時間のうち、五九九時間（60%）を充当している。これは、近年の地上戦等基礎訓練装置及び新機動艇等の新

器材の導入、防衛学の在り方検討の進展及び女子学生訓練の四年終了（女子第一期生の卒業）等、訓練課程を取り巻く環境の変化に対応して訓練科目表を見直し、平成九年からは三十時間増加して五六九時間としたものである。実施に当たっては、共通訓練と同様に陸・海・空各幹部候補生学校からの本校に対する要求を取り入れるとともに、特に、陸・海・空各幹部候補生学校における訓練課程との連携に留意している。専門訓練は、将来自衛官勤務の基礎をなすとともに、その方向付けをする重要な訓練であることから、特に次の点に留意して教育を行っている。

* 学生を引きつける「魅力的な訓練」の実施

* 「知的訓練」及び「考えさせる訓練」の実施

* 短時間で効果的な訓練を実施するための「コツ」を教える訓練の実施

* 更に自学研鑽の動機付けをするための「よつてきたるゆえん」「戦史・戦訓」を教える訓練の実施

また、女子学生の訓練においては、共通訓練及び専門訓練とともに男子学生と同一条件で実施し、訓練の評価も同一に行っている。しかしながら男女の性差に基づく訓練環境の整備等の要配慮事項については、きめ細かな対処に留意して訓練を実施している。その他、教育訓練の実施にあたっては、主として訓練部所属の訓練教官が実施しているが、定期訓練など同時に多数の教官を必要とする際は、防衛学教室の教官及び陸・海・空各部隊等からの教官・助教の支援を受けている。

(三) 競技会

競技会は、旺盛な体力、気力及び強固な団結心を養成することを目的とし、昭和42年以来続いている伝統的な行事となっている。春季（カッター）、夏季（水泳）、冬季

第七回国際防衛学 セミナーについて

14期 山内敏秀

一 全般

防衛大学校は、平成十三年七月十日（火）から十九日（木）の間、アジア・太平洋地域の十二ヶ国の参加を得て第七回国際防衛学セミナーを実施した。本セミナーは「防衛大学校における防衛学教育・研究の充実発展を図り、防衛大学校の新しい時代への対応に資する」とともに「参加各国の防衛学教育・研究

（断郊・体育・持続走）競技会及び開校祭における棒倒し競技会の実施及び事前訓練を通じて、各学年に求められる資質の錬磨及び学生個人の体力、気力の錬成を図ることを狙いとしている。このため、事前訓練は指導組織（職員・学生）を確立するとともに、周到な訓練計画を準備し、その実施に万全を図るよう留意している。また、事前訓練の実施に当たっては、訓練開始・終了時刻を厳守させる等、規律心あるいは競争事項の涵養の場とらえ指導している。このほか、競技不参加者の絶無を期するため、平素の健康管理及び校友会活動との調和を図るとともに、水泳、断郊及び持続走競技不参加者に対しては補備訓練を実施し、全員参加の気風の醸成に留意している。

三 卒業生の皆様に對する要望

部隊等研修あるいは部隊実習で学生が駐屯地・基地を訪問した際は、よろしく指導をお願い致します。（訓練課）

の充実発展及びわが国との安全保障にかかわる相互理解の促進に寄与し、併せて「国内の一般大学の防衛学に関連する学部・学科および部内外の同種研究機関等の教官、研究員に對し、相互理解の場を提供し、相互啓発に資する」ことを目的として平成六年度から実施されているものである。

二 実施の概要

本セミナーへはアジア・太平洋地域の十四カ国を招待し、カナダ、中国、インドネシア、韓国、マレーシア、モンゴル、フィリピン、ロシア、シンガポール、タイ、米国およびベトナムの十二カ国から参加があった。なお、残念なことにオーストラリアおよびインドは当初、参加を予定していたが、諸般の事情から直前に参加を取りやめた。その一方、防衛研究所および海上自衛隊幹部学校から初めての参加を得ることができた。

なお、今回のセミナーから十三年一月に竣工した本館に設けられた国際会議用の第二会議室を使用した最初の国際会議であったことを付け加えておきたい。

第七回にあたる今年度は「士官学校における軍事科学技術教育」をメイン・テーマとし、「士官学校教育における軍事科学技術教育の意義」および「科学技術が飛躍的に発展する環境化における軍事科学技術教育の在り方」という二つのサブ・テーマを設定し、研究会において第一セッションでは前者を、第二セッションでは後者についての討議を予定した。

七月十日、海外の参加者等十三名（カナダの代表が夫人を帯同）がほぼ予定どおりに来日。翌十一日、実行委員長である田原幹事主催の昼食会の後、十三時から開講式が行われた。西原正学校長は開講式の挨拶において「士官学校あるいは防衛大学校における専攻と任官後の職域とが必ずしも一致しない現状を考慮すると特定の職能を付与するのではなく科学的思考を可能とする基礎的知識が求められて

いるのではないか」との視点から「理工学教育において先端分野との比較において基礎分野の教育のあり方、カリキュラム上での教養科目と専門科目の適正な比率、さらに教官の研究活動と教育活動のバランス」等を例に引きつつ「軍事科学技術の重要性を指摘することとは比較的容易である。これに反し、士官候補生／防大生に理工学の分野をどのように教えるべきかそれほどやさしい問題ではない。」と述べられた。

開講式に引き続き、基調講演が行われた。その細部については後に譲ることとしたい。

十八時からは海外参加者に対するホーム・ステイ／ホーム・ビジットを受け入れてくださる横須賀市民との懇親会が本館大会議室で実施され、海外参加者と受け入れ横須賀市民との顔合わせも行われ、和気藹々のうちに終了した。

十二日（木）から十四日（土）は本セミナーの中心を占める研究会が行われ、十二日の第一セッションでは先にも述べた「士官学校教育における軍事科学技術教育の意義」について、また十三日の第二セッションでは「科学技術が飛躍的に発展する環境化における軍事科学技術教育の在り方」について報告、討議が行われた。研究会に関して特筆しておきたいのは、今回、防衛学教育者群以外の学群から五名の発表・討議委員の参加を得、各委員はそれぞれの分野から積極的に議論を展開し、研究会の活性化に大きく貢献したことである。十四日午前の総括討議をもって研究会は終了し、その日の午後は希望する海外参加者は横須賀市民の家庭に招かれ、日本文化、日本社会に対する理解を深めたものと思われる。

十六日（月）から十七日（火）にかけて広島、海上自衛隊幹部候補生学校、同第一術科学校の研修を実施した。今回のセミナーの主題である科学技術との関連を考え、往路には新幹線（のぞみ）を使用することを計画した。このため、早朝宿舎を出発し、各人は宿舎謹

製のランチ・ボックスを手には横須賀線で東京へ進出。東京駅ではJRの運行時間の正確さが裏目に出て、若干名が下車し損ね、隣駅まで行ってしまうという椿事も出来したが、大きな混乱もなく、広島に到着した。

広島では平和公園を研修の後、宿泊予定地である呉に移動した。

十七日午前は、海上自衛隊幹部候補生学校及び同第一術科学校を研修。海外参加者は幹部候補生学校における教育・訓練に高い関心を示し、一方で教育参考館では深い感銘を覚えたようである。

十八日（水）の午前は、八カ国の参加者が東京研修を行った。その日の夕刻、終講式に引き続き、学校長主催の招宴が品川プリンスホテルで行われ、海外参加者のみならず、参加国の駐日武官、横須賀市民も参加した。招宴では日本への理解をより深めて貰うことを目的として日本舞踊、居合及び少林拳法の演武も行われた。時間の経つのを忘れる盛会であったが、金井副校長による参加国の各言語での乾杯の音頭で杯を揚げ、全ての行事を終了した。

三 成果の概要

（一）基調講演では、「士官学校における軍事科学技術教育」を主題とし、将来戦の様相を見積り、そのような環境下で士官／幹部自衛官に要求される科学技術に関する知識、判断力、責任感、規律心、創造性等の能力及び本校における軍事科学技術教育の現状について報告が行われた。

これに對し、「指揮官が戦場において正しい判断を下せるためにはどのような教育を実施しているのか」、「防大生の創造力を高めるためにはどのようにしているか」といった質問が海外参加者から出された。創造性の向上については、海外参加者から「オープンなクラスにおいてプロジェクトを付与し、自分で立てた計画に基づき、研究を実施し、その成果をクラスにおいて発

表させることにより創造性の向上を図っている「旨」の発表があった。また、本校委員から卒業研究もその役割を果たしているとの説明があり、理解が得られたものと考えられる。各セッションおよび総括討議を通じて、次のような共通した関心あるいは問題点が認識された。

ア 今回のセミナーの主題である「軍事科学技術教育」を越えた、より本源的問題である士官学校における教育の主眼は何かという問題について貴重な意見交換がなされた。「軍事科学技術にのみ通曉した者は専門家であって我々が必要とする士官ではない」との発言が象徴するように各発言者からは「全人格的教育」の重要性が指摘された。これに関連し、士官学校教育における文系科目と理系科目の比重に関しても意見交換が行われた。「全人格教育」の具体的方策、文系科目と理系科目の適正比率については各国の教育システム、士官学校の位置付け、教育年限等の様々な要因が異なることから議論の収斂は見られなかった。

イ 前項とも密接に関連するが科学技術に関する教育において先端内容を教授すべきか基礎的内容を重視すべきかについて各参加者は高い関心を示し、活発な意見交換が行われた。「軍事科学技術」および「先端技術」をどのように捉えるか、今後の士官に必要な資質として「科学的思考に基づく健全な(軍事的)意思決定」ができる能力が不可欠であり、その能力を育成するための科学技術教育の重要性が指摘された。また、ハイテク兵器の操作に関わる教育は士官学校卒業後に実施し、士官学校ではそれらの教育の受け皿となる力を涵養するとの意見もあった。

ウ 教育手法について、各国とも若者の気質の変化の中、いかに候補生/学生に授

業への動機付けを行い、いかに考えさせるかについて悩みを抱えていることが明らかにされた。

第一の問題は学生の学習意欲の低下であり、その対策として「習っている学科がなんの役に立っているのかを理解させる」、「勉学に対するハングリー精神を涵養するような雰囲気作りを行う」等が提示された。また、「中長期を見据えた将来の将校の理想像」を確立すべきであり、このためにも「全人格教育」の必要性が強調された。

第二の問題は原則として各教官が個々に対策を立てることではあるが、「学生が理論を新しい課題に適用せざるを得ない状況に陥るような質問を課する」等の教務運営上の工夫が参加者から紹介され、参考となるものであった。

エ 上記に関連して、教務運営におけるコンピュータの役割について議論された。コンピュータを利用した教育の有効性は指摘されたが、その一方でコンピュータはより良い教育環境を構築するための道具の一つに過ぎないという点で共通の認識を得た。

おわりに

これまで述べたようにセミナーの中心であった研究会においては、軍事科学技術の革新的変革が進む中、士官候補生にどのような軍事科学技術教育を実施すべきかという問題に対する参加各国の関心は高く、活発な議論、有意義な意見交換が実施された。また、その他の行事も整齊と実施され、相互理解を促進し、国際防衛学セミナーの根本である信頼醸成に寄与したものと考えている。

最後に、関係各部の同窓生の支援がなければ、このような大きな国際セミナーを成功裏に終了することはできなかった。紙面を借りて改めて謝意を表したい。

平成13年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

校 友 会 名	成 績	部 員 数		校 友 会 名	成 績	部 員 数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部 短艇委員会	開校記念祭リーダー公開 全日本カッター競技大会 準優勝 関東地区新人戦 優勝	10 68		グライダー部 ソフトテニス部 ボクシング部 レスリング部 ボート部 フィールドホッケー部	全日本新人競技会 8位 秋季関東学生リーグ戦 9部5位 関東大学トーナメント 4部3位 東日本学生リーグ戦 2部5位 5大学レガッタ総合優勝 男子 秋季関東学生リーグ戦 1部6位 女子 秋季関東学生リーグ戦 2部5位	19 25 46 26 28 32	5 2 15
バスケットボール	男子 秋季関東リーグ戦 4部10位 女子 春季神奈川リーグ戦 3部5位	54	12	ワンダーフォーゲル部 パラシュート部	男子 秋季関東学生リーグ戦 1部6位 女子 秋季関東学生リーグ戦 2部5位 尾瀬、西湖、谷川岳、南アルプス等で活動 日本選手権大会	16 13	
柔道部 ラグビー サッカー 剣道 空手道部	神奈川県学生春季大会 団体4位 秋季関東大学リーグ戦 3部7位 神奈川県リーグ戦 1部4位 全日本学生剣道優勝大会出場 全国国公立選手権大会 3位 春季関東リーグ戦 1部6位	40 101 66 59 68	3	個人Jr.の部 優勝 3年 上田 2位 4年 水野、3位 4年 種橋 神奈川7大学リーグ戦 2位 全日本学生演武会出場 東日本学生グランド選手権大会 団体10位 秋季南関東リーグ戦	32		
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部7位 女子 秋季関東リーグ戦 8部昇格 春季関東学生リーグ戦 4部6位 関東理工系学生競技大会	28	14	男子 1部昇格、女子 2部4位 全日本学生大会 団体演武2位 関東学生大会 団体演武優勝 関東学生選手権大会	50 41 32 37	1 6 5	
卓球部 陸上競技	男子団体優勝 女子団体優勝 男子 関東理工科リーグ戦 6部3位 女子 関東理工科リーグ戦 9部2位 神奈川リーグ戦(春・秋) 2部優勝 秋季関東学生ライフル選手権大会 2部4位	17 57	1	フルーレ 4部2位、サーブル及びエペ 3部2位 神奈川県社会人選手権大会 69kg級優勝 1年楠、77kg級優勝 4年秋元 全国国公立対抗大会 団体3位 東日本学生リーグ戦 2部昇格 全関東学生ダートトライアル選手権大会	1 6 5		
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦 6部3位 女子 関東理工科リーグ戦 9部2位 神奈川リーグ戦(春・秋) 2部優勝 秋季関東学生ライフル選手権大会 2部4位	41	8	男子 1部昇格、女子 2部4位 全日本学生大会 団体演武2位 関東学生大会 団体演武優勝 関東学生選手権大会	37 31	2	
硬式野球部 射撃部 山岳部 水泳(競泳)部 水泳(水球)部 ハンドボール部 アメリカンフットボール部 ヨット(小型)部	剣岳、穂高岳、金峰山、鷹取山、盾岩等登山 東部国公立大会 男子6位、女子7位 関東学生リーグ戦 1部昇格 秋季関東学生リーグ戦 5部5位 関東学生リーグ戦 2部Bブロック6位 関東学生選手権秋季大会 470級11位 スナイプ級10位 イタリア海軍兵学校・リボルノ市共催国際レース	24 8 30 17 23 87 25	1 1 5	団体17位 秋季関東大学選手権大会 男子 5部6位、女子 4部6位 自衛隊全国大会 団体優勝 横須賀港祭り、定期演奏会 自衛隊音楽祭り	17 20 9	2	
ヨット(クルーザー)部	士官候補生の部8位 全日本学生選手権大会 3位 全国寺井大会 大学生の部2位	16	4		27	9	
銃剣道		33			24 26 51	3 8 5	

UNDOFに参加して

第一師団司令部 三等陸佐 鬼頭健司

一 はじめに

私は、平成十二年八月十六日から平成十三年二月十四日まで一八三日間、UNDOFの一員として国連平和維持活動に従事し、人として、自衛官として、非常に貴重な経験をすることができました。また、日本を離れ、世界の関心の集まる地域でいろいろ考えさせられました。貴重な投稿の場をいただいたので、参加所見を述べたいと思います。

二 UNDOF及び日本隊について

まず最初に、UNDOF及びゴラン高原派遣輸送隊（日本隊のこと）について理解していただくために若干説明します。UNDOFは、United Nations Disengagement Observer Forceの略であり、日本語で言うと、国連兵力引き離し監視隊となります。UNDOFは、第四次中東戦争の結果、一九七四年五月にイスラエルとシリア両国間で締結された兵力引き離し協定に基づき、国連の安全保障理事会により設立され、ゴラン高原に展開しています。なお、ゴラン高原は、イスラエルの北東部、シリアの南西部に位置し、北はレバノン、南はヨルダンに接しています。東西約二十km、南北約七十km、面積は神奈川県約半分の大きさです。緯度は福岡県南部と熊本県北部に位置し、気候は全般に乾燥しており、十一月下旬～三月下旬が雨期と言われています。また、水資源が豊富であり、イスラエル・シリア両国にとっての戦略的要衝です。

UNDOFの任務は、①兵力分離・制限地域に關し、協定等の履行状況を監視する。②両国の停戦が厳密に遵守されているかを確認する。③停戦状態を保持する、です。司令部、二個の歩兵大隊、兵站大隊から編成されており、現在司令官には、スエーデンの少将が任命されています。派遣国は、オーストリア、スロバキア、ポーランド、カナダ、日本の五カ国です。

ゴラン高原派遣輸送隊は、カナダ主体の兵站大隊の一部を担っています。平成八年一月からUNDOFの仲間入りをして、半年毎部隊交代をしています。我々が派遣されたときは第十次隊でした。隊本部、輸送班、分遣班、警務班から編成されており、派遣人員は、四十三名、陸上・海上・航空自衛官からの混成部隊です。任務は、日常生活物資の輸送・道路等の補修です。

なお、任務以外にも、積極的に他国との競技会に参加し、また、日本文化紹介行事などを主催して派遣各国との交流にも努めています。

三 UNDOFへ参加しての所見

(一) 指揮官として更なる修養を痛感

UNDOF派遣を通じて、指揮官として日本においては得ることができない経験を積むことができました。我々の部隊は長官直轄部隊であり、指揮官としてかなり重い状況判断・決心をしなければならぬことが何度かありました。特に、昨春秋以来イスラエルとパレスチナの紛争が激化した際、一つ一つの輸送任務をどう遂行するか、思い悩みながら、決心をしました。

また、たった四十三名の日本人が、言葉の通じない諸外国の軍人の中で業務に従事すると言うことで、言葉では説明することが難しいストレスが蓄積してきました。このストレスは端的に言えば人間関係に現れ、お互いの

関係がギクシャクしてくることもあります。その中で指揮統率して任務を達成すると言うことは、指揮官として厳しいものがありました。この点に関しては、今なお反省しきりです。

(二) 自衛官、日本人のすばらしさの再確認

時間通りに行動できる、決められたことは確実にその日のうちに実施をする、業務では手を抜かないなど日本人としては当たり前のことが、他国の部隊長には「プロフェッショナル」と映り、日本隊はすばらしいと賛辞をいただきました。日本にいるとなかなか気がつかない日本人の優れた点を再認識し、日本人として誇りを感じました。

(三) 意志決定の要領の相違を理解

UNDOFでの仕事のやり方は、日本的な業務の積み上げ方式でなく、欧米型のトップダウン方式でした。派遣直後は戸惑いも多くありましたが、慣れてくると指揮官同士の話し合いで物事を決定し業務を円滑に遂行できました。

(四) 国連PKOシステムへの習熟の必要性

伝統的PKOに分類され、二十七年という長期に活動しているUNDOFに参加できたことで、多国籍の現場において、いかに複雑な業務をシステム化しているかを理解することができました。国連PKO活動もかなりシステム化、マニュアル化されており、今後日本が更なるPKOへの参加を視野に入れるなら、このシステムを十分に理解して活動する必要があると感じました。

四 おわりに

任務を完遂し帰国した今、UNDOFに参加でき本場に有意義であったと確信しています。また、上記で述べたことのみならず、四十二名のかけがえのない仲間をもつことができました。更に、日本と大変異なる、中東の文化、歴史、宗教についても直接触れ、見識

を深めることができました。

最後に、我々が任務を無事終了することができたのも、遠く離れた日本からご支援いただいた数多くの皆さんのおかげであると感謝しております。（八十八U・東大卒・筑波大研修第三十普通科連隊中隊長等歴任）

タイ王国国防大卒業生との交流について
（もうひとつの同窓会）

練習艦隊司令官 海将補 保井信治

平成十三年度遠洋練習航海は、去る四月二十日から九月十日までの約五か月間にわたり実施され、ペルシャ湾岸七か国、マダガスカル及び東南アジア方面の計十二か国十五寄港地を親善訪問した。

タイは、今次遠洋航海における最後の訪問国であり、八月中旬から下旬にかけて首都バンコク及び主要海軍基地であるサタヒップ港に寄港し、各種の研修及び親善行事を実施した。

タイは、アジアにおいて特に親日的な国として有名であるが、練習艦隊の寄港に際しても、タイ海軍の全面的かつ親身な支援により、予定された諸行事をすべて順調に終えることができた。タイの友好親善の促進に大きな成果を挙げることができた。

入港中には他の寄港地同様、表敬訪問及び艦上レセプションのような儀礼並びに親善交流に加えて士官学校や海軍基地及び、特にタイでは、東南アジア唯一の空母及びトランシット中に寄港していた米海軍空母等の研修を行うことができた。また、バンコクにおいて

は、タイの防衛大学校出身の陸海空軍将校による同窓会が開催され練習艦隊の防大出身者総員が招待された。今回は、このタイで行われた防大五十周年記念同窓会について報告する。



タイでは、例年一月に防衛駐在官（陸上自衛官）が、また、八月にはタイにおける防大出身の陸海空軍士官が主催して、それぞれ交互に同窓会が実施されている。今回は防大創立五十周年記念祝賀という節目にあたり、練習艦隊の入港を機に、八月十九日にタイ空軍オフィサーズ・クラブにおいてタイ側の主催で同窓会が実施されたものである。

同窓会には、駐日武官を経験された元副首相のソンプーン・ラホン空軍大將（退役）及び前空軍司令官のタナニット・ニアンタム空軍大將らを始めとする駐日武官経験者及び防大出身の陸海空軍将校とその家族等が多数参加しており、異国の地における母校の盛大な同窓会に驚くとともに、防大同窓生及び日

タイの絆の強さを改めて実感し、深く感動した次第である。

会場では、タイ海軍のバンド演奏、プロ・ダンサーによる華麗な民族舞踊やマジック・ショー等が企画され会場を沸かせた。

タイの卒業生による防大の紹介がスクリーンに映し出されると、自らの学生時代を懐かしむ声が上がリ、また、会場の各所では日タイの同期生同士がそれぞれの思い出話に花を咲かせ久々の再会を祝っていた。

練習艦隊側からは若手幹部及び実習幹部らが防大追遥歌を披露したほか、会の最後には日タイ両国の同窓生が全員肩を組んで学生歌を斉唱し盛況のうちに同窓会を終了した。

防大六期生に初めてタイから留学生を受け入れて以来、タイ軍における防大同窓生は、累計八十人を超えるまでに至っており、間もなく、防大出身の将官が続々と誕生する時期を迎えている。

彼らは、タイの将来を背負う国家の至宝として、各軍において必要な配置に就くエリート軍人というだけでなく、タイにおける知日、親日的な一大パワーとして、さらに良好な日タイ関係を構築する上で、大きな掛け橋となっていることを、身をもって感じた。

現在防大には、以前からのタイ、シンガポールからの留学生のほか、東南アジアを中心に合計八か国から本科・研究科あわせて八三名もの留学生在学中と聞いている。さらに、今次遠洋航海においても各国の海軍司令官等を表敬訪問した際、先方からは是非とも防大に留学させて士官教育を受けさせたい旨の発言もあり、創立五十周年を迎える今、諸外国からの注目が一段と増していることを再認識した。

これは、単に防大の士官学校としての教育理念及び教育体系が高く評価されているだけでなく、我が国に対する各国の高い関心の表



れである。我が国を取り巻く情勢は近年大きく変化し、従来の経済大国に対する憧憬及び経済支援といった経済活動のみの興味から、最近では、特にPKO活動や信頼醸成活動等、「目に見える国際貢献」に一定の成果を挙げている、これらの活動に対する各国からの高い評価が我が国の国際社会に貢献できる国家としての存在感を増大させている。これは、我が国を不安定な国際社会における安全保障上の重要なパートナーとみなしてきている証左であり、各国がアジアにおけるリーダーの一員である我が国との信頼醸成等の安全保障環境を構築、整備する上での掛け橋となる人材を留学させているのである。

このように、創立五十周年という節目を迎えるに当たって、防大の果たす役割と諸外国からの期待は益々高まりつつある。

個人主義至上の現代において、四年間にわたり、「二つ屋根の下に寝て」、「同じ釜の飯

を食った」、防大の同期生は、かけがえのない仲間であり、他の組織では決して培うことのできない、国や時間をも超越した強固な信頼関係が醸成される。

同窓会終了後、嬉々として二次会に連れ立って出て行く後輩たちを見て、同期に留学生のいない私は非常に羨ましく感じると同時に、それぞれの国家の次代を担う若者たちの強固な友情と信頼関係を目の当たりにし、この上なく頼もしく感じた次第である。



第五回期別対抗ゴルフ大会

第五回同窓会期別対抗ゴルフ大会は、九月二十八日（金）千葉CC川間コースで一期生から十一期生までの各期十名の選手（総一〇名）により行われた。

午前中は、霧雨の天候であったが昼前からは急速な回復をみせ、絶好のコンディションの下各期代表選手は、平素の練習成果以上のスコア獲得を目指し奮闘した。

その結果、グロスの部は、八期生チームが、ネットの部は、五期生チームが優勝した。両チームとも、グロス、ネット部門では初優勝であった。



▲ グロスの部優勝
（8期生チーム）



▶ ネットの部優勝
（5期生チーム）



▶ 阿部会長からの授与（5期生チーム）

ネットの部優勝の五期生は、「五回までの大会で優勝と縁のなかった五期が五回目の記念すべき大会でやっと取ることができました。皆さん

グロスの部優勝八期生の代表は、「ネットの部では今まで優勝したことがないので、今回はグロスでの優勝を同期一丸となって練習しました。欲しかった優勝であり、感激しております。ありがとうございました。」とのスピーチ
八期生代表選手名：織田勝、上野春樹、三代武徳、末廣容徳、千葉恒平、熊谷文憲、泉卓郎、笠井健介、池島奎一郎、江見英樹

ありがとう。」とのコメント
選手：杉浦功一、富岡勝、三村正勝、福地建夫、千葉瑞園、江添正倫、松本哲雄、多田力、青山利雄、白石充司

特に、今回は優勝トロフィーを寄贈頂いた松本前防大校長も参加され阿部会長、君嶋・利彦両副会長と一緒にラウンドされました。懇親会時、前校長から、「卒業後一期の人は、五十年、今回初参加の十一期生の方も卒業後四十年経過とのこと、このように卒業生が一同に会して親睦を深めることは歴史を感じるとともに極めて有意義であると思います。益々同窓会が充実発展することを期待しています。」とのスピーチを頂き、会長



▶ 松本前校長からのカップ授与（8期生チーム）

グロスの部	成績	ネットの部	成績
優勝	8期生	優勝	5期生
準優勝	10期生	準優勝	9期生
第3位	9期生	第3位	10期生

から「来年は、五十周年行事を計画しており同窓会として一致団結、玉成を期しております。」との答辞でゴルフ大会を閉めくつた。
なお、ゴルフ大会も今回で五回目で各期代表選手もやや固定化されつつある現状を打破するためにも、事務局は各期の予選会や練習ラウンドの機会増大（勿論安価で）をゴルフ場と調整していく所存です。愛好者は同期ゴルフ仲間との連携を密にして積極的にゴルフを楽しんで下さい。来年はあなたの参加を待っております。

事業部 森永吉彦

第四回期別対抗テニス大会

平成十三年五月二十日（日）、超好天の中、第四回防衛大学校同窓会テニス大会が開催された。各期から選抜された選手は、昨年のリベンジを期して、家族の声援を受けながら熱戦を繰り広げた。大会は、一期生から五期生までのシニア・リーグと、六期生から初参加の十一期生までのレギュラー・リーグに分けて実施され、現役の庭球部員の積極的な支援を受け、整齊と進行し、万一のため掛けられていた傷害保険のお世話になることなく無事終了した。大会後の懇親会では、あまりの好天と熱戦の連続のためビールの売れ行きがよく、在庫が底をつき、役員が買い出しに走る光景も見られ盛況裏に終わり、来年の大会での再会を約して散会した。参加選手は、各期チーム十名



であつたが、補欠選手を含め一三名がエントリース、シニア・リーグでは、八名のご婦人が出場した。成績は次のとおりであった。

シニア・リーグ					
優勝	準優勝	第3位	第2期	第3期	第5期
レギュラー・リーグ					
優勝	準優勝	第3位	第7期	第6期	第10期

第五回大会は、平成十四年五月十九日（日）、予備六月二日（日）に開催される予定である。

毎年、初参加チームが、選手の選抜に苦勞している。二期生は早めに選抜を終え、優勝を目指して練習を積み重ねることをお勧めする。

事業部
明野充功



第三回期別対抗囲碁大会開催

第六期生が二十七勝五敗で圧勝！

防衛大学校同窓会が主催する各期対抗の親睦・交流行事として、第三回囲碁大会が平成十三年九月一日（土）、日本棋院会館において盛大に開催された。当日は初秋を思わせる比較的涼しい一日であつたが、一期生から今年初参加の十一期生まで約九十名の選抜棋手が一同に会し、熱戦が繰り広げられた。開始に先立ち阿部博男同窓会会長兼大会会長から、親睦交流の趣旨を対し、囲碁を一日楽しんで欲しい。又来年は防衛大学校創立五十周年記念行事が行われる。皆さんには創意を持って積極的に参加をお願いしたい。と挨拶された後、高比康之競技委員長から競技実施上の注意があり、熱戦の火蓋が切れて落された。

競技は事前に各期担当委員全員で決定した

	勝ち数					順位
	1回戦	2回戦	3回戦	4回戦	合計	
1期生	2	3	1	3	9	11
2期生	1	3	4	5	13	9
3期生	7	7	5	4	23	2
4期生	5	4	3	4	16	5
5期生	3	5	5	4	17	3
6期生	7	7	5	8	27	1
7期生	4	3	5	5	17	3
8期生	4	3	3	1	11	10
9期生	4	2	5	4	15	6
10期生	4	2	5	3	14	7
11期生	3	5	3	3	14	7

対戦表にもとづき、オール互い先、四回戦で実施された。各回戦終了と同時に各期担当委員が競技結果を持ち寄り、集計結果をその都度壇上のチャートに掲載しつつ、緊迫した中で午前中に二回戦、昼食をはさみ午後二回戦の競技を実施した。競技途中救急車を呼ぶハプニングもあったが、参加者全員無事に予定通り競技を終了した。

その後表彰式・懇親会に向け会場整理中に総合結果が出、直ちに表彰式に移った。優勝した六期生の代表者に対し阿部会長から優勝カップ及び副賞が授与された。会場において四戦全勝旗手十七名：宮本 双葉旗手、中川 久雄旗手、朝倉 謙旗手、倉田 眞治旗手（以上三期）、清水 聡一旗手（四期）、川上 陽太郎旗手、川崎 浅夫旗手、上村 俊一旗手（以上五期）、濱本 良弘旗手、壺内 成人旗手、仲路 唯禮旗手、志賀 茂男旗手、伴 明旗手（以上六期、萩原 嘉明旗手（七期）、佐藤 至茂旗手（八期）山 岸 征洋旗手（九期）、平井 龍雄旗手（十一期）の紹介があり全員で健闘を称えた。結果は準優勝三期生、以下五・七期生（同率）、四期生、九期生、十・十一期生（同率）、二期生、八期生、一期生の順位となった。

表彰式後高比競技委員長の乾杯の音頭で、懇親会に入り記念撮影を交え和やかな歓談の内に本大会は成功裏に終了した。更に修養を重ね次年度に賭ける！選手も見受けられた。次年度五十周年記念行事に向け、今後アイデアを募り実りある行事としたい。

事業部 若木利博

平成十三年 度 顕彰碑献花式

穏やかな小春日和に恵まれた平成十三年十一月十七日防大顕彰碑前において、平成十三年度の顕彰碑献花式が阿部同窓会会長（実行委員長・野澤同窓会小原台事務局長）の執行の下厳粛に執り行われました。学校長はじめ学校幹部、各期生会代表、同窓会事務局長等多数の方々が参列し、黙祷、学生儀仗隊による儀仗、会長及び西原学校長による慰霊の辞の後、参列者全員による献花が行われ、八十七柱の殉職同窓生の御冥福をお祈り申し上げました。幸いにして本年度は、殉職者がおりました。

総務担当 阿保文敏



同窓会費納入状況 に大異変！

昨年、防大本科卒業生が二万人を越え、今年、防大設立五十周年を迎えた今日、同窓会の活動も活発化し、大いに発展しているのはご存知のとおりと思います。さて、同窓会の経理を担当している者

として最近の経費納入状況は心配せざるを得ないものとなっております。紙面を通して特に若いクラスの皆様には是非とも会費に関する理解をして頂きたく筆を執っている次第です。

毎年の同窓会活動費は、新しく会員となる防大卒業生から拠出された終身会費をもって充てています。すなわち、十三年度は、十三年三月に卒業した四十五期生から拠出予定の会費をもって充てる訳です。

過去四十数年、卒業生からの会費をもって毎年度の活動経費とし、余裕が出た分を積み立てて今日に至っておりますが、昨年度、本会費の拠出に大異変が起きました。

すなわち、十二年度は四十四期三百九十名の八十五パーセント（過去の拠出平均値）の三百二十九名が納入するものと予測していましたが、結果は二八一名、四十七パーセントの納入率でした。

したがって、十二年度は半分程度の収入しかなく、積立金からの繰入を余儀なくされました。

納入者を更に細かく見ると、陸二百五名中、六十名（納入率29%）、海九十二名中、三十七名（40%）、空九十二名中、八十四名（91%）となっております。

四十四期の空の皆さんには敬意と感謝を申し上げ、陸及び海の皆さんには毎日の業務に多忙を極め、ついつい会費の件をお忘れになったことと思います。今からでも何等問題ありませんので、それぞれ連絡を取り合って会費納入の件、宜しくお願いします。

次に四十五期の皆さんも現在までの納入を見ていると樂觀を許さない状況を呈しています。

昨年六月、同窓会事務局の代表者が各幹部候補生学校を訪ね、四十五期の皆さんに同窓会の活動状況等を説明しておりますので、会費納入についても十分に理解を得られたものと期待しています。

終身会費六万円（三尉一少尉月額の四分の一）という一見高いように思われるかもしれませんが、日本人男性の平均寿命を七十七歳として、防大卒業から毎年、年会費として納めるとすれば千円百円余りです。

多様な任務を遂行し、期待される自衛隊を支える初級幹部として実施すべき、あるいは勉強すべきことが多々あるうかと思いますが、勤務の合間、山を、海を、空を見つめつつ、母校をそして同窓会を想って欲しいものです。

二十一世紀を迎え、部隊の骨幹をなす若い皆さんの限らないご発展を祈念を申し上げ、同窓会への理解をお願いする次第です。

なお、同窓会費の納入等についての問い合わせ先は左記のとおりです。その他同窓会の活動等についての疑問あるいは意見があるようでしたらいつでも連絡して下さい。また、十二月の代議員会あるいは三月の総会においても大いに発言して下さい

経理担当 十一期（海）河村 嘉宏
防衛大学校同窓会本部事務所
東京都新宿区本塩町二一三二
TEL/FAX: 〇三・三三五一・八九一〇
E-mail: bodaj@nifty.com

同窓生

アラカルト

剣道の海外普及事情

七期(陸) 杉田 明傑

はじめに

現役を退官後、土田元校長も通つておられた丸の内にある長い歴史を持つ道場で同期生の江藤兵部君達と一緒に剣道を続けている。それが縁で三年前から財団法人全日本剣道連盟(以下全剣連)の国際委員会を委嘱され、警察、教職等の剣道専門家や学識経験者等からなる国際委員会の末席に身を置いている。全剣連には各種の委員会があり会長に意見を具申し、連盟の運営に資しているが、国際委員会は、剣道の海外における普及振興に関する活動を行っている。

剣道は、野球やサッカーに比べるとメデイア性は少ないが海外普及という視点に立つとき、日本文化の中でもその独特の価値とともに、ありかたについて再認識することが多い。以下、剣道の海外普及の現状等について紹介したい。

一、剣道の特徴

剣道を論ずるとき、その中にある精神性や人間修行的な面を抜きにすることは出来ないだろう。古今東西、鉄の発明以

来、人を倒し己を守るために剣が用いられるようになる、少しでもこれを効果的に用いる方法を研究し鍛錬を重ねたであろうことは容易に想像がつく。その意味においてこの種の武術は我が国固有のものではない。しかし単なる斬り合いの術は、文明の進歩とともに不要となり多くは姿を消してしまっている。然るに、これが、「礼」につがり、「剣禅一致」の言葉のように「禅」とつながり、精神性を深めて人間修行の道となつて今日維持されているものは我が国の剣道を除いてないと言つてもいい。これが剣道の特徴だと思ふ。実際、全剣連は「剣道の理念」として「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である。」と定めているし、審判規則には「相手に非礼な言動をする」と最大限の罰則が適用されるように定めている。これらは他の競技にはない表現だろう。また、剣道の試合において、勝者が飛び上がつて喜んだり、ガッツポーズをすることはないし、観衆も拍手以外の応援は戒められている。声援も鳴り物も論外でありそれがマナーとなっている。

このように武道として精神性を重視した特異性があるため、普及に課題を生ずることもあるが、逆に多くの海外の人々



を惹きつけていることも事実である。小生が接したシンガポールの青年は「祖父母は、私が剣道をやることを喜ばなかった。しかし、英米にも留学したが、科学とテクノロジーばかりで、精神的なものはなかった。日本の近代化の背景に武道の精神があつたのではないかと思ひ剣道を修行することにした。」とのことであつた。ドイツの剣道家は、「精神を集中して相手を圧する。これが剣道の魅力だ。」と言っている。また、韓国の青年は「神前に礼をすることには抵抗があるが、礼節を重んじ精神と身体を鍛えるのに最適のスポーツだ。」と述べている。このように何らかの形で剣道に精神的なものを求めている声は多い。

二、世界大会と国際組織

戦前戦後を通じ海外との文化交流や、在留邦人を中心に行われてきた剣道も、日本の高度成長とともに飛躍的にその裾野を広げてきた。そして昭和四十年には台湾を広げてきた。そして昭和四十年には台湾において、日、米、台湾、琉球四個チームによる第一回国際剣道大会が開かれた。その後三年に一度の大会は逐年充実に、昨年第十一回大会では四一の国と地域(台湾、香港、ハワイなどは一個チームの参加が認められている)から三〇〇名以上の男女が米国サンタクララに集まり勝敗を競つた。結果は団体、個人ともに日本が連覇したが、男子団体決勝では、韓国に二勝一敗引き分けという際どい勝ち方で、実力は伯仲してきている。ちなみに三位はカナダであつた。次回は二〇〇三年に英国グラスゴーで開かれる予定であり、準備に着手しているところである。

一方、規模の拡大に伴い、昭和四五年には国際剣道連盟(IKF)が結成され、現在四一の国と地域がこれに加盟している。IKFは会長と事務局を日本に置き、一二名の理事からなる理事会によつて運営されている。理事の構成は日本四名、他にアジアゾーンから二名、米州ゾーン三名、欧州ゾーン三名であり、小生も日本代表理事の一人として名を連ねている。

現在の剣道人口は、韓国の四十万人を筆頭に仏、台湾、独、米、ブラジル、カナダが千人から五千人規模であり合計約四三万人と推定している。ちなみに日本の剣道人口は登録者だけで、一一六万人である。

三、海外普及活動

現在行っている普及活動には、前記のような大会の開催のほか、年間十回以上の講師の派遣や講習会がある。派遣経費は被派遣国が負担することが多いが、海外交流基金や、民間団体の寄付によることもあり、全剣連が独自負担することもある。小生も派遣員となり数ヶ国を訪れたがその都度、人々の関心の高さを感じるとともに、教えられることも多い。海外の剣道家の中には、新渡戸稲造の「武士道」や鈴木大拙の「禅」などに関心をもっている者も多く、取り組み方も熱心で、日本の文化を再認識する機会ともなっている。

八期(空) 工藤雄司君がかつてフランスに滞在派遣されたのもこの事業の一環であるし、他に何名かの自衛官が短期派遣されている。また派遣ではないが、十四期(陸)の上松大八郎君や同(海)大

田文雄君、二九期(空)村上和彦君達がそれぞれの海外任地で剣道を普及し交流したことは未だに現地で語り継がれている。

他に毎年、夏の最も暑い時期に有段者を日本に招き、滞在経費を全剣連が負担して、約十日間「外国人剣道指導者夏季講習会」を埼玉県北本市で行っている。

この講習会には本場での修行を目指し希望者が多く、人選、国選に担当者は苦勞している現状である。今年は、二六回目であり、主要国のほかロシアやグアテマラ、ユーゴスラヴィア、南ア等からも参加し、二三ヶ国、五十六名(年齢は二十一歳から五十五才)による合宿であった。日本側の主任講師は、経験豊富な八段教士が当たっている。小生は、二回目の参加となったが、日本人を含め多国籍八十数人の昼夜に亘る修行の日々は壮観で心を打つものがある。国籍も人種も違いますが、ただ剣道修行という点において、共同体なのだ。真摯という言葉が一番ふさわしく稽古はもとより、起居動作に至るまで教えられたことをよく守る。彼らもまた、帰国したならば、教える立場に立つ人々である。

ひところ日本は、洪水のように製品を輸出し、経済摩擦を引き起こしたが、文化面でこのような活動をしていることは、意外に知られていない。剣道界にとつてPRは苦手とするところであるが、二六年間もこのような国際文化活動をしていることを、もつと内外の人々に知ってもらっても良いのではないかと思う。同時に、これらの人々が、憧れの「サムライ」の本場で剣道修業を終え、道場を一步出て、わが国の世情を見るとき、一

体何を感じるであろうか、気になることである。

四、剣道とオリンピック

剣道をオリンピックの種目に加えることが、剣道の普及には最も近道ではないか、という考えがある。また、剣道界は、オリンピック種目化を悲願としているのではないかと思っている人も多い。事実、日本を除く多くの国々は内心そのことを望んでいる。昭和三十九年の東京オリンピックの時、剣道は公開競技として、これに参加した。当時の剣道界には、オリンピック種目化が視野にあったことは事実のようだ。オリンピック種目化を希望する国々の意見は、「このようにすればいい剣道をより多くの人々に見てもらい、参加してもらおうべきだ。また、種目化されれば国家から、補助が受けられるし、入賞すれば、賞金が付与され励みになる。」というものである。オリンピック種目化の条件は、二十五ヶ国以上の参加国があり、過去二回以上の世界大会を開いていることである。この条件からすれば、剣道は、はるかにこのハードルを越えている。然るに、現在、全剣連は、敢えてオリンピックの種目に入れることを意図していない。理由は、武道としての剣道の真髄(精神と様式)が、勝敗だけが全ての、そして好むと好まざるとに関わらず、商業主義や国際政治の影響を受け易いオリンピックの場で、守られることは至難であろうとの認識に立っているからだ。やはり、本来太刀をもって生死を賭することから発した剣道は、祭典イベント的な面もあるオリンピックにはなじまないと私は考えている。柔道の国

際化の経緯もまた、貴重な参考となっている。ある国で、日本大使が「国際化すれば版權はなくなりますよ。」と言ったことが印象的であった。

やはり剣道は、身の引き締まるように拭き清められた道場で、師弟関係的な人間関係のもとに、心、技、体に亘り本来の剣道を伝えていくことが指導の原点なのだろう。そのためには、わが国剣道そのものが競技化、スポーツ化にながれることなく、武道の原点に立ち返りそれを維持することが前提であることは言うまでもない。

世界剣道連盟(IKF)は前述のとおり理事十二人中、八名が外国人である。現在は家元としての權威を守っているが、理事会が民主的な合議制である以上、将来は予断を許さないものがある。極論すればフェンシングのように電光表示による勝敗判定の方式などが導入されないとも限らない。家元理事の責任は重いものがある。

五、韓国の剣道

韓国の剣道人口四十万人は、人口比で見るとわが国と大差がない。道場も四〇〇以上あるといわれているし日本同様、多くの小中高校の学生も学校や道場に通って稽古をしている。高段者も多く、実力も前回の世界大会が示すように、わが国に肉薄している。このように盛んな理由は、戦前からの日本との関係、儒教的な精神風土や気性が剣道と合う、などが考えられる。また、韓国剣道(クムドウとよばれている)は韓国独自の剣法が源流であるとの意識があるからだと言う人もいる。(一九九七、六「剣道時代」)

ともあれ、剣道の海外普及にあたり韓国との連携の必要性は増している。

終わりに

全剣連が剣道の海外普及のために行っていることは前述の他に、昇段審査や中古剣道具の海外送付などもある。このように、人的物的、経費的な負担のもとに、海外普及をすすめている目的は何であろうか。私なりに言えば剣道の普遍的価値の共有ということになろう。生死を賭した斬り合いから発し、生者必滅、諸行無常の中に死生観についての先人の深い思索と長い鍛錬を経て、武士道をはぐくみ、人格形成の手段としての剣道が確立されてきた。剣道に「交剣知愛」という言葉があるが、剣道を通じ切磋琢磨するなかに、国境人種をこえて、互に理解し合い、尊敬し合い、平和な世界構築に貢献することこそ剣道海外普及の目的ではないかと思考している。

十期応用化学同期三人 中国で奮闘中

十期応用化学 古澤 典彦

一 はじめに

十期の応用化学は一個班ですが、陸海空要員が揃っている珍しい班で、卒業後の結束も固く毎年十月十二日前後を十期十二班の日としてグランドヒル市ヶ谷に集い、旧交を温めています。その十二班から三名(押川、遠山、古澤)が現在中国遺棄化学兵器廃棄事業に参

画し、齢六十に近いながらも防大応用化学の名を高めようと奮闘しているところであり、今回その活動の一部を皆様に御紹介したいと思います。

二 中国遺棄化学兵器とは

昨年九月多くの新聞等で、中国東北部の北安における遺棄化学兵器の発掘回収の状況が報道されたので、御存知の方も多いと思いますが、簡単に中国遺棄化学兵器について述べておきます。

中国遺棄化学兵器とは、中国に遺棄されている旧日本軍の化学兵器のことであり、一九九七年に発効した化学兵器禁止条約は、条約発効後原則として十年以内に他の締約国の領域内に遺棄した化学兵器を廃棄することを義務付けております。中国は一九九七年四月に条約を批准し、日本は中国の遺棄化学兵器を廃棄する義務を負っています。



条約成立以前の一九九〇年に中国が日本に対してその解決を要請してきており、一九九一年以降外務省が中心となり多くの現地調査が行われるとともに、日中政府間で協議を重ねられ一九九九年七月中国遺棄化学兵器廃棄に関する覚書に双方が署名しました。我が国としては関係する各省庁の協力の下に、政府全体として取り組むことを基本としており、現在内閣府の遺棄化学兵器処理担当室が中心となって、この事業を推進しています。

三 中国遺棄化学兵器の特性

中国遺棄化学兵器は以下のような特性があります。

(一) 数量が極めて多い。

我が国はこれまでの現地調査の結果約七十万発の旧日本軍のものと思われる化学兵器が中国国内に存在すると推定しています。

(二) ほとんどがハルバ嶺に集中、されど広範囲にも分布

遺棄化学兵器のほとんど(六十七万発)は、中国東北部の吉林省敦化市ハルバ嶺地区に埋設されていますが、それ以外にも南は浙江省から北は黒龍江省まで広く分布しています。それらの地域は一部を除き、生活環境が日本に比べかなり悪いところですが、腐食等が進み危険性が増しているものもある。

(三) 腐食等が進み危険性が増しているものもある

これらの化学兵器は戦後長期間にわたって埋設されていたため、腐食、損壊が進んで化学剤が漏れているものもあると見られます。また砲爆弾の炸薬等に使われているピクリン酸は、感度の高いピクリン酸塩を形成している恐れがあります。

(四) 処理上の困難性がある

更に旧日本軍の化学剤はルイサイト、ジ

四 遺棄化学兵器廃棄事業と我々との関わり

当初の現地調査の段階から防衛庁は要員を参加させ、調査に協力しておりますが、我々のようなOBが中国に渡り現地調査、発掘回収に携わるようになったのは、押川が自衛隊を一九九七年に定年退職し遺棄化学兵器廃棄のために作られた某企業に入社し、現地調査に参加したのが最初です。遺棄化学兵器の廃棄処理は

① 現地調査を行って、旧日本軍の化学兵器が否かを特定する。

② 砲弾等を発掘回収する。

③ 保管庫に輸送し、処理までの間保管庫に保管する。

④ 実処理(前処理、本処理、後処理)・・・処理方法未決定

のようなプロセスで行いますが、これらに携わる要員としては化学兵器・砲弾等に関する知識・技能及び長時間防護のための装備品を着用し悪条件下でも仕事をこなす体力・気力・忍耐力を持つことが必要であり自衛官なかならず化学及び武器(弾薬)職種の人間が適任です。しかしながら自衛官の参加には様々な制約があることから、OBによって必要数を確保しようということになり、昨年九月黒龍江省北安市においては三〇〇〇発を超える発掘回収事業においては、押川、古澤を含め多くの陸上自衛官OBが参加し大きな成果を挙げました。これが契機となつて本年六月日本国際問題研究所に今後行われるであろう現地調査、発掘回収事業に対し実働面から支援するため自衛官OBを集めることとなりました。現在六名の陸上OBが勤

五 奮闘状況

二〇〇一年度の関連事業の一端は、次のようであります。

瀋陽におけるサンプリング事業…六月六日

…二十四日、押川、古澤参加

唐山・石家荘における現地調査…七月十日

…十九日、押川、古澤参加

南京における事前調査…七月二十二日～二十五日、古澤参加

英国DSTL研修…八月十八日～九月二日、古澤参加

南京における事前探査…九月九日～二十九日、押川全日程参加、古澤参加(二十四日～二十八日)

ハルバ嶺における道路建設視察…十月十九日～二十一日、押川、遠山、古澤参加

武漢における現地調査…十月二十二日～三十日、押川、遠山、古澤参加

南京における発掘回収…十一月五日～二十九日、押川、遠山全日程参加、古澤参加(十四日～二十九日)

唐山における現地調査…十一月五日～十二



日、古澤参加
正に東奔西走、休む暇とてなく奮闘していることが御理解いただけるでしょう。

六 まとめ

このような超多忙の中で我々が音を上げることなくチャレンジしている大きな理由は、我々の知識・技能が必要とされていることに對する満足感・充足感であり、中国遺棄化学兵器廃棄事業に参画することに生きがいを感じていることでしょう。また一衣帯水とはいながらも、なかなか行く機会のない中国に行けるというのも理由の一つであり、草の根として日中関係を良好なものとしたいとひそかな自負もあります。

定年後の第二の人生を営みあるものとして実感しつつ、今後とも我々は持てる力を発揮して行きたいと考えており、皆様の御声援を御願ひ致します。また今後我々のメンバーは増強される方向にあるので、自分もやってみたいと思われる方はチャレンジしてみても如何でしょうか。

化学兵器禁止機関査察局に勤務して

本科第十五期生 秋山 一郎

皆様のご支援で当職を得、平成九年六月に単身オランダに赴任してから、検証活動の中心である査察局の立ち上げから、査察団の派遣と査察時のトラブルシューティング、問題解決のための加盟国との事務折衝等を積み重ね、なんとか無



OPCWの旗とともにオペレーション・センターにて

事に四年間で一、〇〇〇回を超える査察実績を上げるまでに漕ぎ着ける事が出来ました。直接は日本の防衛に貢献しないポストではありますが、国際的な場で「国際貢献」という防衛庁・自衛隊の新しい活躍分野の一端を担う重職にあることを光榮に思っております。

世界平和のために設立された国際機関と言いましても、実態は各国それぞれの国益がぶつかり合う国際政治の渦中にあり、査察という実務を成功裏に進めていくため、機関総員五〇〇名中の約半数を占める二三〇名（出身約六十ヶ国）の多国籍プロ集団を部下に持ち、査察マシーンとして一丸となして（しかも英語を駆使して）仕事をさせる苦労は並み大抵ではありませんが、いまさらバタ臭いことをしても付け焼き刃なので、自衛隊で培った頑張りや誠実さと部下への思いやりを基本とし、思い切って「浪花節」流で統率しています。

驚いたことにこの「浪花節」流アプロ

ーチが、多国籍であってもOPCWのような新しい国際機関で途方もないプラス効果を発揮しています。国連を含め、国際機関では自分の出世のために部下の手柄を横取りする上司が多い中、自ら監督責任を買って出て部下のことを本気で庇う上司がいること自体が彼らにとっては驚きです。人種・宗教の区別なく「異文化」と「異なる価値観」を認めあつた上で全員のチームワークの必要性を説いていく私のアプローチは（査察局という実動部隊であつたことが成功の鍵ですが）なにかにつけて一言あるプロ集団の中でも強固な連帯意識を醸成していくことが出来ました。もちろん実際に部下を身体を張って庇ってやることと、是非で処罰する決断が必要なのは言うまでもありません。

例えば、操作マニュアルの誤りで米国の秘密文書を間違つてキューバ大使の公邸にFAXしてしまった部下を（本人はクビを覚悟していましたが）、「単純に本人のみの責任は問えない」と判断して私が監督責任を負つてやり、その夜のうちに米国代表団長とキューバ大使の両者を自ら説得して無事解決したり、口ばかり達者で、肝心の「軍令」に従わないチェコ人の査察団長を「一年のみの契約更新」という嚴重注意処分にしたというように、自らは是非非を実行して火中の栗を拾つてみせることが肝要です。あとは、ちゃんとした情報源の確保でしょう。情報なくして独断専行するのは、「伏魔殿」の国際機関では単なる無鉄砲者で終わってしまいますので……

結論は、（一）自衛隊のやりかたは国

際機関でも十分通用する、（二）異なる文化・価値観を尊重しつつ共通の目的・目標のために強いリーダーシップを発揮していく、（三）それを裏打ちする「最後の責任は俺が取る」、ということに尽きると思います。

これからは自衛隊がもっとも国際舞台で活躍できる場が増えて行くわけですが、（残念ながら、語学のハンディの克服が一番の課題ですが）我々の能力・アプローチには全く問題はありません。UNに尻込みする必要はありません。自信をもって事に当たりましょう。それを証明するためにも引き続きオランダでがんばって「浪花節」の実践に努めますので、今後とも引き続き皆様のご支援・ご鞭撻をよろしく願ひいたします。

我が人生二〇〇年、生涯現役!!

海上十七期 大段 和廣

卒業以来二十八年、コンピュータ、事務機器営業一筋で今日に至っています。営業二年目、米日本社の教育部のカリキュラムで行動科学心理を用いた営業教育がありました。高い営業実績を達成した時の社会、会社、家庭における、満足している自分の振るまい、言動、行動様式を強くイメージし、その状況を獲得するために、楽しく営業活動を行い、いかに高い目標にチャレンジし達成するかのすべてを受講しました。根性と体力で営業実績を上げられると自負していた私には、新しい何かを目覚めさせるものでし

た。私にとってはイメージトレーニングの始まりでした。また、上司から意志あれば物事は成就する。人類が月に立つことができたのは、ケネディが月に人を送りたいという意志を持った故に実現したのだと、意志、イメージの重要性が強く印象に残っています。営業に限らず人生目標を根性と忍耐で達成するのではなく、案に何でもやり遂げていく事を、営業という職業を通じて体得しました。子供たちが小学生になってから、このイメージトレーニングを家族に、もちろん始めました。毎年正月家から場所を移し雰囲気を変え、ホテルのレストランで食事の後、チビラベルを配り、二年後の自分の姿、勉強・スポーツ・遊び・手にしたい物等、そしてそれを手にする為の一年何をするのか等を書き、一人ずつ家族の前で公表し家族で支援をすることを確かめます。この毎年の行事のラベル集は我が家の財産になっています。この習慣は長女の結婚にまで成果を出したようです。

部門をマネージメントする立場になって、会社のトップ方針を受けて自部門の営業戦略を立案することが最初の仕事になります。営業部門では営業戦略を立案する際、戦場を市場、武器を商品、兵力を営業員、兵たんを事務・物流・サポートスタッフ、敵を競合他社に分類し、軍事戦略書を参考にしています。技術革新による製品の機能性能の進歩、市場要求の変化、サポートシステムの変化に即応した営業力を磨きつつ、競合優位に戦えるよう、市場と市場にマッチした課題解決手段を迅速に提供すべく準備をします。プレジデント誌の野中郁次郎氏（元防衛大学教授）の記事に、製品の本質が、ハードウェアの機能や品質、価格から、それらによって提供される情報や知識にシフトしている現代、企業活動において「知識社会」を迎えつつある。組織全体にわたる「俊敏な思考」と「機敏な行動」

が強く求められている。故に企業も機動力に富んだ世界最強の軍隊といわれる米海兵隊に学ぶべき点が多いと述べています。ここからヒントを得て、アジルカンパニー（機敏な企業）を目指し、部門の年度初めのキックオフに際して、海兵隊のビジョンを参考に営業コンセプトを作成し、販売戦略（マリン作戦）を展開した。その際同期の泉君に海兵隊についての話をお願いしたところ、当時湾岸戦争さなかで湾岸戦争に参加し、横須賀に一時帰港している海兵隊の中佐から、直接生の声を聞かせてもらえることとなった。部員もその迫力ある話を聞きキックオフミーティングは成功裏におわった。各部門から営業が集結し新生の営業部門が誕生し、スタートしたばかりであったが、チーム一丸のムードを早々に醸成する事が出来た。機動力を持ち部員それぞれ自己変革を推進することで、その初年度、事業構造の変化の兆しが見え始め、難易度の高かった販売目標を達成しました。マリン作戦では目指す方向を明示し私の思いを徹底する為、考え方、目標達成手段、価値観等を一にするべくトルあわせに議論を重ね、阿吽の呼吸で業務遂行できる信頼関係を醸成し、実行計画を共有することに注力した結果が成果に結びついたものと考えます。コンセプトの「ページ（私の思い）を記す」。

（一）エブリ・マリン・ア・ライフルマン（海兵隊の基礎能力）を目指す。→早急なセールスマン・セイルスマネジャー・スペシャリストに基盤となるスキルを身につけよう。（二）成果（戦果）の達成→製品サービスを迅速かつ効率的に市場に送り出し、お客様を豊かにする。（三）海兵隊要件を備えよう→販売部組織の自己革新の継続①平時の構想力と緩やかなビジョンの共有②官僚制とタスクフォースを具備する柔軟な組織構造の維持

↓方針／システム営業戦略立案&マリン作戦展開（事業の構造変革）③表裏一体の情報通信体制と迅速な物流システムの構築・業種・業務別キーマンによるタスク実行④阿吽の呼吸で動く為に知識や思想の原形を共有⑤双方向コミュニケーションによる相互信頼の醸成⑥トップが常に前線にたつ「前線指揮」→部門長の率先垂範⑦「最後に骨を拾う」浪花節非合理的価値を信じて

こうして、毎年、年度がスタートする度に、何の疑問も覚えず目標達成に邁進することを繰り返して来ました。しかし、目標は達成するが何かスッキリしないものを感じるようになり、現代は人間の物理的快適さを求め、物質中心の社会で、情報技術、科学技術、生産技術の進歩を一層加速させています。その社会の構成員の一員として活動している自分の姿を第三者的に見る事を忘れていたのです。人間生きていく上で、社会人、企業人、家庭人の三つの輪がバランスよく保たれてこそ、人間本来の有り様と何年か前から考えていたことが思い出されました。振り返ってみると仕事に傾注しておれば、企業の成長と日本経済の成長につながるものと、企業人の輪が大きく、私の思考回路が、会社・自部門の業績に占められている、アンバランスさに立ち止まった状態にありました。その状況下、ノーベル経済学賞（平成十年）を受賞したインドのアマティヤ・センの「経済を物質だけではなくて、人間の価値、倫理、自然との関係、調和、こういうぜんたいでの評価をすべきだ。」という論文が目にとまり、何かを呼び戻すきっかけとなるものでした。又同時期に、中村天風（日露戦争の始まる前、明治三十五年十二月陸軍参謀本部情報班員として蒙古に派遣される）の著書「成功の実現」を一読しました。中村天風を師事した人には、東郷平八郎元帥、原敬元



首相、山本五十六元帥、石川素重元鶴見総持寺禪師、倉田主税日立製作所元社長、松本幸四郎七世歌舞伎俳優、杉浦重剛儒学者、堀越二郎ゼ口戦設計者等、軍人・政治家・文化人・禅僧・企業人等がおられます。本文中に、「人間はこの世の中に、世の中の進化と向上に順応すべく、生まれてきた。」「人生を価値高く生きるには心の積極化が重要」「蟹は甲羅に似せて穴を掘る（人は心のスケール以上の人生は作らない）」の文面にふれ、目先の仕事のことばかりに比重の高かった私は「私は何をする為に生まれてきたのか、自分にとって本当に大切なものは何か。」「自分の価値は何か」を真剣に考えるようになりました。話は飛びますが、この著書の中に、東郷元帥の話が出ています。中村天風師からクンバハカを教わった時に、「日本海の大戦の時に、もしもこの方法を知っておれば、敵の旗艦の沈没する一部始終をゆくり見ることができたが、自分の立っている指令塔で、敵の三十三センチ砲が炸裂した。これをついて見て、至近弾に気を取られた瞬間に敵の旗艦が沈没したため、報告書に一部始終をみていたと書けなかった。」といわれた述懐が私は非常に専らと思った。と記されて

いる。東郷元帥は天風師を哲人と称えて書を贈つておられます。書には「神国哲人出、扶桑靈海開、英雄興兒女、都入法門来」(神国に哲人出で扶桑の靈海を開く。英雄兒女と興に都て法門にきたる)と記されている。

(クンバハカ、肛門を締め、同時に、肩の力を抜いて、下腹部に力を充実させる。)

平成十三年夏、昭和四十一年、四十二年の二回、堀越先生の依頼により中村天風師が防衛大学校で「心と人生という問題」という演題で講演されたテープを聞くことができました。堀

越先生の「学生はすでに相当の自覚が出来ているだろうが、いつ何時どのように国際情勢が変化するのか解らない現在、心の問題と言う重要な事の理解を、学生に持たせたい」という強い思いから講演が実現したようである。この講演から四十年経たず、同時多発テロを契機に私達は国際情勢の大きな変化に遭遇し、防衛の任務も大きく変化しつつある。このタイミングで、四十年前にタイムスリップして中村天風師の講演を聞いた私に、同窓会紙欄に寄稿依頼があった事に不思議さを感じ、敢えて中村天風師の講演の内容を挿入させて頂きます。講演に、「心の問題は真剣に生命を考える人には、大問題である。生命に対する心の重大性を本当に正しく認識している人が少ない。昭和二十年以降、物質文明が異常に進歩し、精神文化が停滞した傾向のなかに生まれ、習慣性から肉体の方を尊重し、心を自分の注意から外におく日本人の一般的傾向がある。どのように学問、位地、名位を高めようが人生一回限り、ダブルペーシはない。一回張りの人生を価値高く生かさねば、万物の霊長としてこの世に生まれた甲斐がない。命は肉体と心を一丸としており、さらに心と肉体とを結びつけている神経系統を堅持するには、事ある日も事なき日も、心に積極的態度を持たせるこ

とが重要である。難事にぶつかっても平常心で心を空虚にせずうわずめることもなく、平素と同様な対応をするには、心の積極化が重要である。肉体は右向けといえ右を向くが、心というのは肉体と同じようになかなか統御出来ない事に気が付く。我が命、我身のものでありながら、心掛けざる心、思うようには動かない。ある訓練を行えば肉体を取り扱おうと同じように心を取り扱うようになれる。訓練法は堀越先生、佐々木先生に聞かれれば教えていただける。」と講演されています。

人生一〇〇年、生涯現役と定める私にとって、生涯現役の三分の一を通過中の今、アマテイア・セン氏の論文、中村天風師の著書「講演テープ」によって、これからの五十年「世の役に立つ自分の価値は何か」「自分は何をやる為に生まれてきたのか」を考えるキッカケを掴むことができました。何時間かかる時でも、心に積極的態度を持たせ続け、心の統御が容易に出来るようにしようと、一昨年五月より、心と身体の鍛練法を出動前約一時間毎日継続して行っています。(富士ゼロックス)

平成十二年度自衛隊統合防災演習について

三十期 山口 芳正

防衛大学校第三十期を代表して、陸上自衛官の山口芳正が一言述べさせていただきます。

私は、今は陸上幕僚監部に勤務しておりますが、ここでは今年の七月まで勤務していた第一師団司令部第三部防衛班長として

の経験談を話してみたいと思います。

防衛班長として勤務したのは、丁度二年間ですが、山北町玄倉川の水難事故に伴う災害派遣に始まり、東海村核燃料施設の放射能漏れ事故に伴う災害派遣等十五回もの災害派遣に携わり、非常に思い出深い勤務となりました。

中でも、在任間で一番印象に残っているのは、平成十二年度自衛隊統合防災演習の主務者として、参加したことです。東部方面総監部は、実質的な演習の計画を第一師団に任せて下さいましたので、ほぼ思い通りに演習計画を立案することができました。

ただ、調整所要は非常に膨大で、部内では師団隷下部隊を始め、それぞれの会場を担当する師団隷下部隊とも調整する必要がありました。東部方面総監部、海上自衛隊の横須賀地方総監部及び航空自衛隊の航空総隊司令部の関係者との調整も実施しました。

また、東京都庁の災害対策部、衛生局及び建設局、警視庁の警備部及び交通部、東京消防庁の警防部、関係自治体、総務省(当時郵政省)、農林水産省、海上保安庁、及び関係企業等様々な部外機関との調整をする必要もありました。

師団で訓練の案を作って、これを東京都庁と調整すると、今度は東京都庁が部外関係機関と調整します。師団隷下部隊から師団に調整が入ると、調整の結節は、三、四つにもなり、非常に手間がかかりました。最後の方では末端の部隊・機関相互の調整を実施することにより、その手間はかなり省けましたが、通常の陸上自衛隊の組織だけで完結する訓練の調整とは違った苦労がありました。

これらの機関と調整を図りつつ銀座、白髭西、葛西、木場、駒沢、舎人、都庁、立川、篠崎及び晴海の十コ会場の訓練計画を策定することは、大変なことでした。

さらに、この準備間は丁度三宅島火山活動に伴う災害派遣及び神津島近海地震に伴う災害派遣並びに七都府県総合防災訓練準備と重なり、本当に忙しく、とすればどの業務も中途半端になる恐れもありました。

この時は、防衛班を始め師団司令部の方々に全面的にお世話になったのですが、中でも、第十一期生の福田師団長始め第十三期生の山下副師団長、橋本副師団長、西村幕僚長そして第二十一期生の越智第三部長等の諸先輩方には本当に世話になりました。非力な私を暖かく見守って下さり今も感謝の気持ちで一杯です。

さらに、第二期生の東京都の志方俊之参与及び第十三期生の神奈川県防災局の佐藤喜久二課長(現参事)にもいろいろとお世話になりました。自衛隊を退官されてからもこのような形で仕事をされている先輩がいます。これは、後輩の私としては大変誇りに思います。これからもお体にお気をつけてご活躍されんことを祈っております。

結局、統合防災演習の方は、私個人としては必ずしも準備万端とは言えないまま本番を迎えたのですが、北は恵庭の第三施設団から南は福岡の第十九普通科連隊まで、各部隊の周到な準備に裏打ちされた活躍によって成功裡に終えることができました。この時ほど、自分一人の力の限界、周りの人の協力の有難さを感じたことはありません。

ここに、改めて各演習参加部隊の皆様にご挨拶申し上げます。有り難うございました。

期生会だより

Kiseikai
Dayori #9

2期生会

◆幹事 — 柚木 文夫

二期生のセンチメンタルジャーニー防大ホームカミングデー参加

平成十三年三月十八日、四十五期生の卒業式にご案内をいただき、防大同窓会によるホームカミングデーが行われた。前年の一期生に引き続き、今回は二期生が案内を受け、当日は家族を合わせて約三百人の二期生一家が懐かしの小原台上に大集合し、互いに久闊を叙し、母校への思いを新たにしました。また、その前夜及び当夜は、横須賀のあちこちで二期生の班会、クラブ会などの懇親会が開かれ、昔に変わらぬ大声が町に響いた。

ホームカミングデー準備のことなど

前年の一期生のホームカミングデー（以下HCGと略記）当日、私も二期生の役員数名が参考のため、行事にオブザーバー参加させていただいた。北は北海道、南は沖縄から集まった一期生の皆さんが、互いに時間の経つのも忘れて談笑しておられる様子を拝見して感銘を受け、この催しを来年も是非続けていただき、二期生自体としても中味の濃いイベントにしたいと思い、早速、二期生会役員会で実行要領の検討を始めたことだった。

二期生の多くが、この平成十二年度をもって満六十五才を迎えて第二の人生を終え、これから夫婦共々悠々自適（？）の生活に入ろうとする時期である。この時期こそ、青春の一時を共に過ごした小原台に集まり、その後縁を得た伴侶共々、我々の人生の原点ともなった往時に思いを馳せ、自ら選んだ生涯への思いを新たにす貴重な機会だろうと考えたものである。防大及び同窓会には申し訳ないが、この機会を二期生として大いに利用させてもらおうというのが実は本音でもあった。

二期生は、毎年十一月に東京で二期生の総会兼懇親会を実施している。しかし、今回の平成十二年度例会については、十一月を三月に延期して防大HCGDに合わせ実施し、東京近辺に限らず、全国から出来るだけ多くの同期生とそのご夫人方に集まってもらおうと考えた。そのため同期生会としては、早い時期（九月）にHCGDの趣旨説明を含めた予告案内を全国会員に発出し、参加予定者を募った。その結果、十二月末時点での参加予定者は三〇八名（内家族一三九名）に達した。参加計画の内容は、卒業式・観閲式の陪席、校内ツアー、同期生会総会・懇親会の三本柱とすることで、防大及び同窓会にご協力をお願いした。日にちが近づき、防大当局の当日の日程・細部計画が煮詰

まってくるにつれ、色々と実行上の問題点も明らかにようになってきたが、それぞれに前向きに打開の途を工夫していただき感謝している。特に、同窓会小原台支部の皆さんには細部にわたりご協力ご支援を賜り心から感謝申し上げる次第である。

晴天に恵まれ二期生大集合

当日は、朝方、小雨のばらつくはつきりしない天候であったが、観閲式の前には嘘のように晴れ上がり、観閲飛行も整斉と行われ、参加者全員の集合写真も好条件で撮影することが出来た。二期生一同の日頃の心掛けの良さの結実と、自らはくそ笑んだ次第である。

当日の出席者は、結果的には二期生本人一六七名を含む二九八名となった。二期生現存会員三二四名の内の過半数の参加である。中には、遠くタイ国から、この日のために駆けつけてくれたK君夫妻の例もある。また、既に車椅子の生活になつてゐるO君を何としてでもこの行事に参加させたいとの奥さんの熱意で、車椅子担送の介助を含め、一家八人総出で参加いただいた例もある。また、H・K・O未亡人三人を含め奥様方が一〇二名もご参加いただいたことも嬉しいことであった。またお孫さんを含め三世代の一家挙げて参加のM君などは、家庭内での同君のステータスがうかがい知れ、微笑ましい限りであった。

卒業生の帽子投げと雄叫びに感激

卒業式陪席では、有事法制整備を強調する森総理の訓示が力強かった。新時代の軍人の道を説く来賓代表山本卓眞氏の

祝辞も感銘深かった。また、卒業証書受領に登壇する学生の情報工学、システム工学、地球科学などといった我々の時代にはなかった専攻の多様さ、留学生、女子学生の多さに、時代の流れを痛感させられた。最後の防大卒業式名物の帽子投げと学生の雄叫びを目の当たりにしては、四十数年もの後輩学生の若さを、うらやましく、また頼もしく実感したことだった。

洗練された観閲行進に感あり

観閲式に陪席した。我々の頃の砂埃のグラウンドとは様変わりして、整備された芝生とアンツーカーの赤色が目に鮮やかである。陸海空の制服に着替えた卒業生の緊張した表情に、往時の我々の思い出が重なり合う。宣誓を受ける陸海空各幕僚長がいずれも防大卒業の先輩、観閲飛行の陸海空航空部隊の編隊長も全て防大卒業生であることに、防大と陸海空自衛隊の長い歴史を改めて痛感した。

在校生の観閲行進では、やはり我々の時代になかった指揮官学生の指揮刀が目々を惹いた。紺の制服によく似合う。とりわけ、指揮刀を帯びた女子学生長の凛々しさが目にまぶしい。ただ、余計な所感を一言。防大学生の観閲行進はなかなか洗練されている。大変整然と上手だとは思いますが、今一つ力強さが感じられないのはどうしてだろう。年寄りの繰り言ではあるが、関係者にご一考をお願いしたいもの。

観閲式終了後、式場のメインスタンドを借りて、HCGD参加者の記念写真を撮影した。約三百名の集合写真ではあるが

なかなか良く撮れており、天眼鏡で同期生いづれ劣らぬ年寄り振りを改めて確認し、憮然とさせられた。撮影を担当していただいた元防大総務課の久保田氏に改めて御礼申しあげる。

懇親会で我々の原点・小原台を再確認

二期生会の総会・懇親会は、学生会館四階ホールを借りて行われた。年次総会もそこそこに懇親会に移り、卒業以来初めて顔を合わせた人、早くに自衛隊を離れて久し振りに顔を見せた人などもあり、四十三年前の昔に帰って、時間の経つのも忘れて積もる話が弾んだ。久里浜時代の珍談奇談、小原台早創の頃の武勇談、陸海空自衛隊勤務のあちこちの思い出、第二の職場での様々、更には最近のエブリーサンデーの自慢など、話題は尽きることがなかった。そして結局、話は又、防大四年間の思い出のあれこれに戻って来るのである。まさしく、我々の人生の原点は小原台にあるということであるうか。

この間、西原学校長、このHCDの生みの親の松本前校長、阿部同窓会長にも来ていただき、ご挨拶を頂戴した。西原校長には、席上、参会者を代表して五十君二期生会会長から、心ばかりの御礼の印しを贈呈した。

この懇親会のケータリングサービスは、昔懐かしい横須賀中央駅前「お太幸」にお願いした。候補数社を役員会で検討の結果、同社を選んだが、同社には我々の趣旨をよく理解してもらい、会場準備や料理・飲物サービス等に、行き届いたサービスをしていただいた。参会者の同

期生とそのご夫人方にも、十二分の満足をしてもらったことが何よりである。

センチメンタルジャーニーの校内ツアー

校内ツアーは、まとまったツアーの時間がとれそうもないことから、同窓会小原台支部を煩わして「校内ガイドマップ」の作成・配布をお願いし、参加者が空き時間に自由に見学してもらうことにした。懇親会終了後から夕方遅くまで、新装成った本館、人文学館、時計塔、学生舎、武道場、二期生寄贈の吉田茂揮毫碑などのあちこちを、ガイドマップ片手に三々五々、家族を案内しながら楽しそうに散策する二期生の姿が見られた。そして夜、横須賀の町は、家族共々の二次会を楽しむ二期生で賑わった。

5期生会

◆理事長―福地 建夫

平成十三年度五期生会総会及び懇親会は、平成十三年六月二十九日(金)にグランドヒル市ヶ谷において開催された。参加者は会員一五七名、婦人三十三名、計一九〇名であった総会は安岡義純理事長の挨拶、平井敏之会計担当理事による会計報告、並びに議案審議(五期生会規約改正承認の件、及び、新役員承認の件)の順に行われたが、規約改正の審議では地区理事の役割等について、いろいろな意見が発表され、活発で有意義な総会となった。

新規約、及び、新役員は、先般配布された五期生会名簿(平成十三年度作成)の最終項に記載されているので五期生は

確認されたし。懇親会は総会に引き続き、根岸勝利副理事長の司会により理事長挨拶、新役員紹介、新役員代表挨拶、来賓挨拶(参議院議員 田村秀昭氏)、乾杯、そして懇親の順で行われ最後に参加者全員で防大学生歌を斉唱し、和気あいあいのうちに終了した。五期生会の運営については、新役員一同、安岡理事長以下旧役員の成果を引き継ぎ、会員の絆をより強固にするための活動を積極的に推進してゆきたいと思っておりますので会員各位の積極的な御協力、御助言をお願い致します。以上

6期生会

◆会長―西村 義明

今年は、昭和七十七年になります。ということは、昭和三十七年三月十七日に小原台を巣立った我々六期生は、卒業四十周年を迎えることになりました。まさに節目の年です。そこで、六期生会は当局にお願いして、六月一日(土)に防大で実施したいと思います。

防大も創設五十周年を迎え、本館や講堂が新装される等、一新されつつありますので地方の同期生もフルムーンを兼ねて是非ご夫妻で参加してください。

昨年の東京での六期生会は、例年通り六月六か六時六分からG・H市ヶ谷で実施されましたが一二五名(うち夫人十三名)が出席して賑やかな会となりました。しかし盛大に同期生会がやれるのもあと数年でしょう。年金生活に入ってから郷里に帰ったり、あの世に行ったりで、いつも会を盛り上げてくれた名物男が一人二人

と欠けていき寂しくなります。

「子孫に小銭を残そう!」なんて考えずに元気な内に奥さん共々行きたい所へ行き、食べたいものを食べ、残余の人生を大いにお謳歌しようではありませんか。

なお十三年度の防大期別対抗競技の成績は、一期から十一期まで参加して、囲碁は優勝、テニスは準優勝(レギュラーの部)、ゴルフは五位と、選手各位はすべて自費で参加して六期生の名誉のために頑張りました。

では、六月一日(土)小原台での再会を楽しみに奥さん共々元気に過ごしてください。

7期生会

◆大越 兼行

北斗会の皆様に報告いたします。

さる七月七日、北斗会(同期生会)総会を防衛大学校で開催されました。参集した同期一〇九名、東京周辺の同期生はもとより、遠隔地の同期生の参席もありました。小原台での熱き青春から40年、皆若き日の面影を残しつつ孫を持ち初老の年頃となり「口だけ達者」なるものの、立ち居振る舞いは年齢相応でした。

この総会で次の二点が決議されました。一 いままで、北斗会は全国を七つの支部に分けて運営していましたが、関東支部と首都圏支部を一つにして関東支部となりました。又、静岡県は中部支部になっていましたが「静岡は交通アクセス等から東京支部に編入した方が妥当である」との意見があり東部支部に編入する事になりました。尚「会員の

居住地、勤務地等の都合により、会員が所属支部の変更を希望する場合は所属支部の変更を認める」事が決議されました。

二 同期生会役員の任期は三年であり本年は役員改選の年になります。次期会長として「大越兼行君、陸（任期H十三年・七月十六・七）との推薦が現役員から有り、案件は議決されました。これに伴い、新役員は次の諸兄に願います事になりました。

本部	会長	(陸) 大越兼行	武蔵野市吉祥寺北町3-9-170	0422-55-7588
	副会長	(海) 玉川尚男	三浦市南下浦町上宮田1334-12-531	0468-88-5383
		(空) 伊藤文夫	清瀬市中里6-95-11-502	0424-94-0812
	理事長	(陸) 若松重英	我孫子市根戸1001-2-610	0471-69-4305
	理事	(陸) 兵頭祥治	横浜市戸塚区品濃町533-1H302	045-824-6778
		(海) 菅原 勉	川崎市宮前区けやき平1-41-404	044-861-8668
		(空) 北原 彰	入間郡毛呂山町岩井1107-52	0492-95-7318
		(海) 高野駿一	横浜市港北区新吉田町1268-1-220	045-544-8431
北海道支部長	(陸) 小澤 肇	札幌市清田区美しが丘2-7-8-7	011-884-3801	018-831-3055
東北支部長	(陸) 阿部多功	秋田市横山登町7-52	018-831-3055	0471-43-5655
東部支部長	(陸) 石田 潔	柏市篠籠田455-2	0583-84-1260	06-6956-2383
中部支部長	(空) 岡部輝男	各務ヶ原市鵜沼三ツ池町5-278-2	0942-38-5204	
近・中・西支部長	(陸) 坂口恭平	大阪府旭区中宮5-4-30-506		
九州支部長	(陸) 伊藤宏美	久留米市中央町13-22-504		

8期生会

◆五味 睦佳

① 桑江良達元第一混成団長を囲む会

八期九州支部は約十年前から、期担当指導官であった桑江元将補を囲む会を実施している。

桑江指導官は第一混成団長を最後に退

官され、その後県会議員として活躍されていたが、脳梗塞にかかられ、行動意の如くならない状況であったが、ゴルフでリハビリに精をだすと一念発起され、回られたラウンド約二〇〇〇との由。その甲斐あって、最近では極めて健康そのもので、毎年九州支部の面々と一々を共にし大いに語られ、翌日は有志とラウンドされることになっている。桑江指導官もこの催しを大変楽しみにされ、沖縄から参加されているが、八期九州支部の面々もこれを機会に相集い大いに同期の団結を高めており、桑江指導官の感化力は依然として健在である。

② 横須賀市会議員への立候補

防大設立以来数多くの卒業生を送り出したにも拘わらず、防大出身の横須賀市議員は未だ一人も選出されていない。そこで市会議員に立候補して見ようかと言うものが我が八期から出そうである。未だ姓名を公表するのはやや時期尚早のこと、名前を出せないのは残念であるが、その節は宜しく。

13期生会

◆理事 川村 成之

防大十三期生会は、平成十年四月に航空自衛隊の内山君が、陸上自衛隊の山下君から「上番し」活動して来たところであり、本年四月をもって海上自衛隊の牧本君（海幹校校長）と交替しました。執行部の体制は、私、川村（海幹校研究部長）が理事、浜田君（東京通信隊司令）が会計、澤田君（基礎情報隊司令）が庶務を務めております。

さて、現下の情勢は、ウォサマ・ビンラディンの企図した同時多発テロによって自衛隊の活動範囲が従来の法的概念や活動空間を大きく超えて拡大し、国民の自衛隊に対する期待が更に高くなっております。一方、我々十三期生は、気持ちは若くても既に老兵であり、その半数を超えた人達がリタイヤー、第二の人生航路に船出したところでもあります。我々が防大を卒業し、自衛隊生活の大半を過ごした二十世紀後半は、冷戦時代だったとは言え、一定の秩序と安定があり、経済的発展が期待出来ましたが、二十一世紀の初頭に立った時、その動向は政治・経済・軍事など、何事を問わず、不確実で不安定であることが予見されます。

その不安定な今こそ、クラスとしての団結、それは小原台で、また久留米／江田島／奈良で、額に汗して共に語り苦しみを分かち合い、数々の思い出の一つの価値観（共産党のような一枚岩と言うより、自民党のように方向がほぼ同じでたとえ異方向であっても許し合える間柄と言う感じ）を共有している我々の心情を大切にすることです。

そこで、この転換期における海上要員同期の事業として、一般大出身者も含め「同期生名簿」の整備に努めています。自衛隊在職中は、官報を見ていれば誰が何処に居ることなど、造作のないことで、クラス間の連絡も容易です。しかし、リタイヤーして放っておくと一人一人が孤立した存在に陥り易く、現在、鋭意、各人の住所・勤務先、それぞれの電話番号、更にインターネット・アドレス等を確認する作業を行っているところで

14期生会

今回は、陸上担当ということで、本科十四期生陸上部会の活動状況についてお知らせします。

一 関東地区

関東地区には、サンチヨロ会なるゴルフ愛好者の会があります。ゴルフでチヨロ、仕事でチヨロそして家庭でチヨロ、を意味した何とも愛らしいほのぼのとした名前です。この生活表現しただけだそうです。

定年後に皆でゴルフを肴に人生を楽しむ趣旨で会をつくりました。今は単身赴任者も参加できるクソ暑い八月とクソ寒い十二月を主に細々と運営しています。が、九年十二月の第一回（七組二十九名）からすでに八回（三組十二名）を重ねております。もう少ししたら本格活動です。多くの同期生の参加を期待しています。

（補給統制本部弾薬部長 加藤慎二）

九州地区

平成十三年度「魅七十会」(幹部期別七十期は「皆若い」九州・沖縄に在住または勤務する防大第十四期卒業生及び陸上自衛隊幹部候補生学校第四十七期生並びに同期相当の有志をもって構成。会長 安部啓司以下会員七十名) 例会を平成十三年五月二十六日(土) 福岡県久留米市西鉄久留米駅東口「ハynesホテル」において、三十二名(内防大十四期二十六名)の参加を得て一八〇〇からの総会に引き続き懇親会を盛大に実施しました。

遠路、関西補給処(宇治市)から駆けつけた安部君をはじめ小倉、佐世保、熊本、別府、福岡等から馳せ参じた懐かしい顔の同期生と親交を暖めること三時間余り、盛会裡に懇親会を終了。六割近くの十九名がカラオケスナックに陣地変換、経験豊かなロマンスグレーの渋い「のど自慢」を披露しました。翌二十七日(日)はマイクをクラブに持ち替え、名門「久留米カントリー・クラブ」において十名が集い親睦ゴルフを実施しました。表彰は「自画自賛」としたので舌戦と珍プレーの続出、和やかなうちに競技を終了しました。

平成十四年度「魅七十会」例会は、平成十四年五月二十五日(土)〜二十六日(日)、火の国「熊本県」で実施を予定(担当 西方総監部調査部 平井久雄)しています。

来年のダイアリーに記載を忘れずに！多数の同期生の積極的な参加を期待しています。

(陸上自衛隊幹部候補生学校教育部 伊藤俊廣)

15期生会

◆正岡 富士夫

小泉首相の靖国参拝騒動の余韻が冷め切れぬ八月十八日(土)、私も第十五期生会は、小原台卒業三十周年記念事業及び総会を実施しました。三色の同期生が一同に会するのは卒業二十周年の総会以来十年ぶりでした。自衛隊を去り全国津々浦々に散らばっている同期生との連絡をとることや在校時お世話になった先生方へのご案内、IT化社会に適応した連絡体制の確立、名簿の作成など多様な業務を適切な統合運用の妙をもって処理し、成功裏に記念事業を終えることができました。

記念事業の一つとして、「敗戦後の日本



のとり方と小泉首相の靖国参拝―私の見た戦犯の遺児たち―という演題で上坂冬子氏による講演会を行いました。一時間余りの短いお話でしたが、題名のとおり氏の体験に裏打ちされたものであり、ご夫人たちの涙を誘う場面も散見される感銘深い講演会でした。

ご来賓には曲壽朗氏(元防大幹事)、柳田益雄氏(元訓練部長)、木村康之氏(元機械工学教室教授)、金井喜美雄(元

航空工学教室講師)、西修(元人文文学講師)、森本敏氏(元小隊指導官)、兼坂弘道氏(元体育教室教官)及び同窓会会長阿部博男氏をお招きしお祝いとお叱咤激励の頂きました。(括弧内職名は、卒業時の職名等)(当時、海上防衛学教室講師でおられた外山三郎氏もご参加頂く予定でしたが都合により不参加)

今回作成した名簿には、防大卒業時と現在、つまり使用前/使用後の顔写真を並べましたので、ふやけ、皺増え、目尻下がり、頭髮淋しき我々も若いときはこんなに凛々しかったということを証明できる材料として大変好評でした。また、その名簿は、学生歌、追遠歌、一九七〇年作成ビデオ「小原台の青春」及び二〇〇〇年作成ビデオ「最近の防衛大学校」とともに一枚のCDに焼き付け、全員に配りました。また、この機に第十五期生会のホームページを開設し、定年後の連

航空工学教室講師)、西修(元人文文学講師)、森本敏氏(元小隊指導官)、兼坂弘道氏(元体育教室教官)及び同窓会会長阿部博男氏をお招きしお祝いとお叱咤激励の頂きました。(括弧内職名は、卒業時の職名等)(当時、海上防衛学教室講師でおられた外山三郎氏もご参加頂く予定でしたが都合により不参加)



絡体制の確立を図ったことは言うまでもありません。

第十五期生卒業生数は、四六三名、自衛隊現役者数は三三九名、同現役外者数一〇二名、物故者数二十二名です。そのうち本記念事業には、同期生の約三十七%が参加いたしました(不思議と陸海、空とも同率)。オランダ・ハーグから化学兵器禁止機関で査察局長の職務にある陸の秋山一郎君や国内では鹿児島、京都、宮城などから既に退職している同期生が多数参加してくれたことは大きな喜びでした。

17期生会

◆泉 徹

現在、十七期として、特段の催しを考えているわけはありませんが、来る平成十五年が我が防大十七期の三十周年記念になりますので、そのための記念の会をどのようにするか模索中であります。先輩クラスの方からのご意見も伺いながら、準備を進めようと思っております。よろしくお願い申し上げます。

(一応、今年の期生会会長を仰せつかっております。)

25期生会

◆会長―高鹿 治雄

一九八一年(昭和五十六年)に小原台を巣立った我々二十五期生は、今年卒業二十周年を迎えました。二十年という節目を記念して、同期生相互の懇親を更に深めるために、平成十三年五月二十六日



(土) 都内において防衛大学校卒業二十周年記念の宴を開催しました。

開催にあたっては、陸海空準備委員(陸:永井君、海:池田君、空:坂本君)をはじめ黒地区入校学生の皆様のご協力を得まして実現することができました。当日は、地理的な条件もあり関東周辺勤務者が主体となりましたが、関西や九州から駆けつけてくれた者や民間で活躍されている者も含め約一五〇名強の会員が集合しました。また、来賓として防衛大学校同窓会会長 阿部博男氏及び元二十五期生担当指導官 中村征人氏、山口壮一郎氏や会員のご家族をお迎えし、総勢二〇〇名を超える盛大な宴となり、本当に楽しい時間を過ごしました。土田元学



校長夫人は、ご旅行のためご欠席されましたが、かわりに暖かいメッセージを我々二十五期生会にいただきました。我が二十五期生会は、他の期生会に勝るとも劣らない団結力を誇っており、今後ますます二十五期生会のネットワークを強固なものにするために、二十五期ホームページとメールボックスを鈴木君(海民間)のご努力で開設しました。なお、今後の二十五期生会の運営は、陸海空及び民間に事務局を置く以下の態勢とし、一層の活性化を図りたいと思いますので宜しくお願いします。

会 長 海:高鹿 治雄(海幹校AC学生
副会長兼民間事務局 空:杉山 一弥(民間)
陸事務局 陸:永井 昌弘(陸幹校教官)
海事務局 海:河村 正雄(防研研修員)
空事務局 空:吉田 浩介(ロシア駐在武官
会 計 空:坂本 卓己(空幹校教官)

役員は、異動等により多少の変更もありますが、ご了承下さい。

☆防衛大学校第二十五期生会ホームページ:
<http://www.comforhousing.co.jp/nda25>

☆防衛大学校第二十五期生会 メールボックス: NDA1981B25@aol.com

※陸海空事務局は、本局を市ヶ谷地区、所要の支局を適宜地方に設置する。

最後に、遠方等で連絡等十分に行き届かなかった同期生の皆様には、この場をお借りしましてお詫び申し上げます。

35期生会

◆山本 光伸

我々三十五期生が小原台を後にして、はや十年が経過いたしました。卒業当初は、それぞれ新しい仕事や環境にとまどい、試行錯誤を繰り返す日々を送っておりましたが、現在は各人がそれぞれ経験を積んで成長し、まさしく組織の原動力として全国の陸海空部隊や外国で活躍し頑張っております。卒業十周年を記念して、我々三十五期は去る三月十六日に新宿プリンス・ホテルにおいて卒業後十周年記念パーティーを開催いたしました。

パーティーには、来賓として我々の恩師である夏目元学校長をお迎えするとともに、関東近辺を中心に遠くは宮崎県からも陸海空自衛隊や民間企業で活躍している多数の三十五期卒業生が参加いたしました。本パーティーは、我々の心に残るものとなりました。卒業生は普段の忙しい仕事をしばし忘れて、久しぶりに学生時代にかえり、思い出話や最近の近況について談笑し、楽しい時間を過ごすこ

とが出来ました。一方、同期生の中には、卒業時とかなり顔の輪郭や体型や毛髪が変化していた者もあり、十年という年月の長さや重みをひしひしと感じました。パーティーの後半では陸海空自衛隊のそれぞれの代表者が「十年間の歩み」と題して、それぞれの部隊経験や職務の概要について紹介を行い、活躍の内容や近況を知ることができ、各々の卒業生が活躍している同期生に負けぬように頑張らねばと、気持ちを新たにいたしました。同期というのは、いつ会っても時間の空白を感じない「心のふるさと」の様なものであり、一体感を持つことにより、防大の卒業生であることへの誇りをより深めることが出来ます。十年後、二十年後もこの様なパーティーが開催され、三十五期卒業生全員がひとまり大きくなり、元気な姿で「心のふるさと」に帰ってくることを願っております。

35期生会の役員

期生会長: 植森 治(航空)
〒981-0503 桃生郡矢本町矢本大林566
南浦官舎241 0225-82-4296
事務局長: 熊谷 三郎(航空)
〒228-0802 相模原市上鶴間910-201 042-765-5538
評議委員: 中迫 博文(陸上)
〒229-1114 相模原市向陽町3-13 3-204 042-757-7086
保科 俊朗(海上)
〒737-2125 安芸郡江田島町大原官有地大原宿舎3-109
0823-42-1998
右田 竜二(航空)
〒340-0831 八潮市南後谷725-1ライオンズマンション
草加東510 0489-97-5025
35期事務局長 熊谷 三郎

支部だより

事務局長 大坪 成二

九州地域支部

沖縄地域支部

事務局長 宮崎 剛

沖縄地域支部は、平成九年十一月に発足して以来、小西忠（一期海）会長のもと、OB十一名、現役二六名の計三三七名で活動しております。特色としては、OB陸海空会員の大半が那覇市に集中して在しており、総会を始めとして、意思疎通を図り易い良い環境にあります。その一方、現役の異動が極めて頻繁であり、現役間であつてもなかなか顔なじみにならないことが悩みの種です。

主な事業としては、「総会及び懇親会」、「防大の部隊実習支援及び懇親会」、「沖縄寮歌祭への参加」、「防大入校者への記念品贈呈」があります。今年度につきましては、

①総会及び懇親会

五月総会に阿部博男同窓会本部会長をお迎えし、「防大同窓会の現状と問題点」の演題でお話していただき、会員一同遠く小原台に思いを馳せながら拝聴しました。その後の懇親会にも参加していただき、大変盛り上がる事ができました。

②防大の部隊実習支援及び懇親会

四月と七月、部隊実習に来た三、四年を迎えて盛大に歓迎会を実施しまし

た。学生も「学校紹介」、「防大生に聞いたアンケート紹介」と趣向を凝らした出し物を用意してくれ、立派に整備された母校に感心するとともに変わらない学生気質に安心した次第でした。

③沖縄寮歌祭への参加

また、年度末には恒例の沖縄寮歌祭への参加を予定しています。これは戦前の旧制高校や新制大学など全国各地の学生寮歌や校歌を披露するお祭り（沖縄出身の方を中心に約三〇〇人が参加）であり、他大学等OBとの親交を深めるとともに防大OBの意気を示す良い機会であると考え、防大制服まで取り揃え窮屈ながらもピシッと決めて参加しております。出場者もノリノリ気分になり、そのまま制服姿で那覇市内を闊歩して帰宅した方もおられた様です。

④防大入校者への記念品贈呈

全員に対して、毎年の同窓会から期待をこめて、激励の盾を記念に贈っております。今年は多数の盾を贈れることを祈っております。

来年度は防大創立五十周年にあたり、地域支部同窓会幹事一同は在沖縄同窓生全員がぐつと顔なじみになれるような事業を計画したいと考えております。同窓生各位のご協力をお願い申し上げますとともに、ふるってのご参加を心よりお待ちしております。（終）

平成十三年度九州防大同窓会（会長二期空中野純人）の活動状況について報告します。

平成十三年度の事業項目として次の五項目を設定し実行しております。

一、未結成支部の解消

二、日本海海戦記念大会の協賛

三、部隊実習防大生の激励

四、期對抗ゴルフ大会

五、総会および懇親会

一、防大五十周年行事を九州において全地域的展開するために現在支部結成していない三地域（佐賀、長崎、鹿児島）について支部の結成を目指しています。

七月六日に支部長会議（支部長および支部未結成の地域は地域の代表者）に、支部未結成地域（佐賀、長崎、鹿児島）の代表者の出席をお願いしたところ、早速七月二十一日佐賀県支部（支部長二期西岡清）が結成され、中野会長から支部名入りの校旗が授与されました。残りの・未結成支部も本年度中に結成される見込みです。

二、五月二十七日、日本海海戦記念大会に協賛参加しました。

当日の午前中は福岡市の箱崎神宮において祭礼があり、年後は博多湾沖の玄界灘で洋上慰霊祭があり、会長以下十余名の同窓生が参列しました。

三、毎年三年生の夏期訓練時に部隊実習が実施されますが現職が実施する行事

に参加し後輩を激励しようとするもりで、陸上は四師団の担当で海上は佐世保地区で、また航空は春日、築城で実施され、それぞれの地域のOBが参加し、学生を激励しました。

四、十月三日に第二期期對抗ゴルフ大会を目前にして出場者は土日は熱心に練習に励んでいるようで、今年は第一回の昨年以上の参加者が見込まれ盛会が予想されています。

因みに昨年度は参加者二期二十二期、五十七名で熊本、長崎、下関等の遠方からの参加者あり、久し振りに再会するもの、初めて顔を合わせる者等でお互いに懇親を深めることができました。

五、平成十三年度の総会及び懇親会は平成十四年二月十七日に福岡市内で開催を予定しています。

参加者は例年現職・OB合わせて約二五〇名が参加し、同窓会本部から副会長等が来賓として出席しています。

当日の目玉は、懇親会で、一時間の講演があります。

防大副校長の「防大の現況」、UNDOF派遣隊長の講演、昨年度は佐監僚長の三・二三北朝鮮工作船事案への対応一等の講演は例年好評であります。

六、これらの活動の源は事務局の要員（OBの各期の代表、現職陸海空の代表）が奇数月の第二金曜日に集まり活動方針の徹底と情報交換及び意思の疎通を図りつつ事業の運営を行っている事にあります。

関西地域支部

会長 牧 次郎

平成十一年に発会し、この十一月で三年目を迎えることになりました。

初年度においては、Eメール講習(参加者四十三名)を皮切りに、現職自衛官を講師とする、防衛時事講習会(四十三名)三期生西本徹也氏の講演会(八十九名)、関西地区カッター大会への参加、東寺の一般には公開しない施設見学(六十五名)、ゴルフコンペ等多彩な行事を無難に行いました。

二年度は、初年度の気負ったこともあったことを反省し、長続きする会を目指し、肩の凝らない会の運営を行うことにしました。

それでも、二年度のヒルトンホテルにおける総会行事には、二期生志方俊之氏の講演会に一三五名(ただし父兄会、走水会の参加を得て)、懇親会に一〇九名が参加し、最後の万歳三唱を最年少の三十四期の末政圭介君が盛会裡に締め括り、二年度の会の運営に弾みを付けることができましたことを本誌面を借り参加した諸兄にお礼申し上げる次第です。

二年度の事業は、この七月にカッター大会への参加、八月に歴史探訪大阪遍(十名)、九月に会員の経済に関する講演「いまなぜISOか…五期近藤欣司氏」「社長の責任…二期鍋島和史氏」(二十五名)を終え、秋には、ゴルフコンペ、歴史探訪大山崎遍、東福寺の参禅と京料理の会を行い、十一月十四日(土)にホ

テル阪急インターナショナルで、八期藤縄佑爾氏を招き、総会・講演会行事を行い三年目をスタートさせることにしています。

又、平成十四年は、母校の半世紀を飾る節目となる五十周年を迎えるにあたり、三月二日(土)に記念講演会を予定しています。

講師は、神戸大学工学部情報知能工学科教授高森年氏(防大七期)で、二十一世紀の科学の先端技術とロボット工学に関し、NHKに出演した以上の生の話を伺えることができ、五十周年の頭書を飾るに相応しい講演会にしたいと意気込んでいます。

少しばかり泣き言になりますが、発会当初、有資格会員四〇〇余名中二七〇名を越えた会費納入者も、二年度は二〇〇名を割り、今回は一五〇名程度となり、会の運営・行事のあり方を考え直す必要性を痛感しており、ボランティアで役員を引き受けているのだという奮りがあることも事実で、今後は趣味・教養と云った文化的活動面を大切に、金の掛からない同好の志の集まりにして、永続させたいと考えています。

会員諸兄の暖かい支援をお願いし、支部だよりを締めさせて頂きます。

【事務局連絡先】総務 七期 河野光男
TEL・FAX〇六・六九一〇・一六二一
(ホームページ) <http://www.aianet.ne.jp/~kazun/>



北海道地域支部

支部長 樫山 貢

北海道地域支部は、平成九年九月に、地域支部としては、全国に先駆けて発足以来、早五年が経過しました。

当地域支部としての特性である、現職会員が圧倒的に多くかつ分散していること。このため、この間「一歩一歩着実に事業を推進してきました。

今年度は、会員から年会費五〇〇円を徴収している関係から、最低限の会員に對する義務として、◎「全会員の名簿を作成し、全員に配布する」また◎「北海道からの防大入校者(新入生)に、激励の「本人ネーム入りボールペンとシャーペン」のセット」を贈呈しました。

去年は、小津札幌地連部長(第十四)が、三十八名に、今年は宗像北方総監部行政副長(第十八)が、母校を訪問し懇談会後記念品を一人一人に手渡した。本人はもとより学校側にも大いに喜ばれたようです。新入生の勉学意欲の向上荷に役立つとともに、OBの存在感を意識してくれれば幸いです。

昨今、自衛官OBの集まりが、「呑み食い」「モグラ叩き」等単なる仲良しクラブ化している感があります。せめて「われわれ同窓会」だけは、活動の狙いを、(後輩「学生」のため、実際に役立つ)また事業としては、(地方でも、輕易に実施できる)をポリシーとして、地道に着実に活動していきたいものです。

タイ地域支部

駐在官 立花 尊顕

タイ支部は、毎年二回家族を含めた夕食会を持つなどの活動を行ってきているが、今年は、防衛大学校創立五十周年を記念して、タイ支部会員が防大の学生時代にお世話になった元在日大使館付武官及びバンコクに寄港予定の海上自衛隊練習艦隊を招待して「防衛大学校創立五十周年記念パーティー」として行うことが決定された。

招待状の発出、会場のセッティング、食事及び余興のアレンジ等全ての準備は、チョンチェーン支部長(防大六期)、タナラット副支部長(防大二十三期)指示の下、防大卒業生であるタイ軍の現役士官自らが率先して進め、去る八月十九日(日)、タイ空軍オフィサーズ・クラブにおいて盛大に開催された。

パーティー当日は、招待客である元在日大使館付武官であったソンブーン空軍大將(退役…元副首相)、タナニット空軍大將(退役…元空軍司令官)、ウィーラ空軍大將(退役…元空軍副参謀長)、ウィラウィット空軍中将(現最高司令部人事部長)、アピシット空軍少將(現空軍情報部長)、サウエーク海軍大將(退役…元海軍参謀長)、ワイポット陸軍少將(現陸軍情報部長)、カラウィット陸軍少將(現陸軍通信部長)、海上自衛隊練習艦隊司令官保井海将補以下幹部及び幹部候補生四〇名の他、防大卒業生とその家族、合計約二〇〇名が参加した。



(尚、プラサート現海軍司令官も元在京武官であり当初出席が予定されていたが、「急用のため出席できない。極めて残念だ。」との連絡があった。)

パーティーは、タナラット副支部長が司会を務め、まず、タナニット空軍大將からの祝辞、保井練習艦隊司令官から御挨拶を頂いた後、タイ支部がパワーポイントを使って作成をした資料を使用して「防衛大学校タイ留学生の現状」についてブリーフィングが行われた。また、タナニット大將は祝辞の中で、「防衛大学校への留学はタイ軍にとって極めて有意義なものである。日本において知識と技術を学んだタイ軍士官は、現在タイ軍の中で非常に重要なポストに就き活躍している。今後とも、この留学のプログラムを継続していく努力をしていかなければならないし、日本側にも将来にわたるご支援をお願いしたい。」と述べられた。

その後、夕食をとりながら余興が行われ、タイ支部がアレンジしたプロのタイ舞踊やマジック・ショウの他、海軍バンドの生演奏に乗せて卒業生のみならず練習艦隊司令官や幹部が自慢の喉を披露したり、練習艦隊の幹部候補生全員が前口上を含む防衛大学校追遠の歌を披露したり、タイ支部の会員同士で近況を確認し合ったりと、大盛況のうちに時間が過ぎた。宴の最後にはタイ支部、練習艦隊司令官以下幹部、幹部候補生、在タイ防衛駐在官等防衛大学校の卒業生全員がステージに上がり肩を組んで防衛大学校校歌を合唱してパーティーを締めくくった。

大成功の「防衛大学校五十周年記念パーティー」であった。

「塵も積もれば山となる」という諺は良く聞かれる諺ではあるが、現在のタイ支部がまさにこの諺を体現したものであるに違いないだろうか。毎年、タイからの留学生



は僅か数名であるが、留学生を受け入れ始めてから約四十年、今では一〇〇名以上が防大を卒業している。数が膨れ上がったのみならず、彼らは率先して「防大五十周年記念パーティー」を自ら企画し実行する様に防大卒業であることに誇りをもち続けているおり、これが防衛大学校同窓会タイ支部という組織を支えている。そして、タイ支部の一人一人が、タイではエリート且つ安全保障をつかさどっている軍人である。彼らの勢力、日本に対する好意が、日本とタイの二国間関係を維持・発展させるにあたり極めて大きな力になることに疑問の余地はないだろうと思う。今後とも、小さな積み重ねを続けていく努力をする事の重要性を深く認識させられたパーティーでもあった。



新年明けましておめでとうございます。

広島防衛大学校同窓生及びご家族の皆様におかれましては今年も穏やかな良い年を祈念しつつ新年をお迎えになられましたことお喜び申し上げます。

広島防衛大学校同窓会(以下「広島同窓会」という)は、OB及び現役の親睦等を図るとともに地域に密着した活動を継続実施しております。

毎年、定期総会のほか春・秋季行事として、ハイキング・ゴルフ・テニスを実施しております。

平成十三年度の各種行事の実績は、二〇〇名余り参加しております。その内訳は、定期総会・講演会・懇親会OB現役併せて六十名、ハイキング延べ四十名、ゴルフ延べ七十名及びテニス延べ三十名等であり各種行事とも盛況裏に終了しております。

二十一世紀幕開けは、平穏裏に経過しておりますが昨年九月十一日米国において過激派テロ集団による民間航空機四機がハイジャックされニューヨークの世界貿易センターのツイン・タワー(高さ四一五m、四一七m各一〇階)及び国防総省等に突っ込みツイン・タワーは間もなく全壊、国防総省等に甚大な被害と五千数百人の尊い命が突然失われましたこと未だ鮮烈に残っております。

二十一世紀の当初から激動の時代の始

広島地区支部

理事兼総務 土手義孝記

まりを予見させるに相応しい大事件であり、国の安全を堅持することの難しさを痛感する次第です。

今年、防衛大学創立五十周年にあたり、わが母校の同窓生は、阿川尚之氏著「海の友情」で「訓練を怠らず、危機に備え、何も起こらなかったのをよしとして現役を去っていった自衛隊将兵の功績は、いくさで名を上げた戦前の陸海軍将兵の功績に、勝るとも劣らないように思える。」と述べられているように、この一翼を荷い半世紀に亘り国家・国民の安寧に身を捧げてきました。

半世紀余りの平和を維持して来られたのは時の情勢に一喜一憂することなく防衛の中核として地道に努力してきた賜物と考えております。

この節目に当たり、防衛大学校同窓会（以下「防大同窓会」という）は、本部と地域支部の緊密な連携のもと各方面で影響力を行使できる組織作りが緊急に必要と考えます。

広島同窓会は、各種団体及び協力団体等と緊密な連携を図り、地域社会で各種行事等を開催或いは他の行事等に参加すること等により広島同窓会の存在をアピールし、その成長を得て本来の目的を達成するとともに、副次的効果として広島地域の政治・経済圏で「意味ある組織」となることが地域同窓会の使命と考えております。

このためには、二十一世紀当初は、予算面を含めて支部組織の充実・発展に力を傾注する時期と考えます。当世は「改革」の時代です。今日までの方針を見なおし、例えば地域とか地区の名のもとに

▲ゴルフコンペ（広島中央GC）



予算配分が異なることなどを抜本的に改め、地域で活発に活動している支部に予算を重点配分すること等ご検討をお願い致します。

又、同窓会本部は、活動拠点を東京方面に過度に集中することなく地域の活動を考慮し、支部と一体となった夢の施策の推進が要求されております。このことは、防大同窓会の活性化になり、地方で生活・勤務している同窓生が本部に期待しているところでもあると考えます。



▲ハイキング（広島百山日浦山）

同窓会本部の支部に対する一層のご指導・ご配慮を期待しております。

平成十四年度広島防大同窓会定期総会・講演会・懇親会を次の予定で計画しております。同窓生の参加をお待ちしております。

一 期日：平成十四年二月二十三日（土）

十六時～二十時

二 場所：呉森沢ホテル本館（TEL 〇八三三二二一〇五八八）

（呉駅から徒歩十五分又は本通り三丁目バス停から徒歩五分）

三 その他

状況により、艦艇見学又は入船山記念館を見学することにしております。

小原台クラブ

幹事長 中島 正雄

会員の相互の親睦を図るという事で菅沼会長（一N）のもと、民間に身を置く約六〇〇名の会員により運営されております。

平成十三年においては、新年賀詞交歓会（二月二日於市ヶ谷）、総会（七月十三日於市ヶ谷）、講演会、懇親会も同時開催（会報第二十四号発行（三月上旬）を定例的活動として行いました。

今年、小泉内閣に於いて会員の中谷元氏（二十四A）が、防衛庁長官に任命され就任されました。会員有志により七月三日激励会を開催いたしましたところ約一〇〇名の会員の出席があり盛会裏に終了しました。又このほど会員の尾辻秀久氏（七N）が財務副大臣に就任され今後の活躍が期待されております。

九月には、米国においてイスラム原理主義勢力による同時多発テロ事件が発生し、全世界あげて対応に苦慮しておりますが、今度発行の会報二十四号に当会副会長舟山真弘（二N）による「二十一世紀を迎えるにあたって―非対称脅威と〇〇TWW―」という小論文が掲載されており、この種の事態が近々に起こり得ることを予見され、かつどのような考え方で対処すべきかを述べておられます。

当会は伝統として、先輩、後輩を意識せずまた肩書きにもこだわらず、共通の信頼関係のもと、素直な議論ができる環境と雰囲気があります。

入会希望者は、事務局あて御一報下さい。別途ご案内いたします。

（事務局）〒一六〇〇〇〇三 東京都新宿区元

塩町二一―三二二

電話／FAX 〇三―三三五五―〇九〇五

平成14年度 防衛大学校同窓会予算

(単位:円)

	項 目	14年度予算	13年度予算	13年度比
収入	会 費 (46期生)	18,320,000	18,120,000	+ 200,000
	預貯金利息	371,000	510,000	- 139,000
	積立金からの繰り入れ	8,959,000	2,970,000	+ 5,989,000
	収 入 計	27,650,000	21,600,000	+ 6,050,000
支 出	事業計画の推進			
	(現職・OB会員交流)	500,000	550,000	- 50,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	300,000	0
	(ホームカミングデーの実施)	800,000	600,000	+ 200,000
	(会員の出版支援)	0	50,000	- 50,000
	(防大卒業留学生との連携)	400,000	400,000	0
	(全国的な情報網の維持整備)	100,000	50,000	+ 50,000
	50周年事業			
	(記念祝賀会)	2,000,000	0	+ 2,000,000
	(地方事業支援)	1,500,000	1,000,000	+ 500,000
	(通信費)	2,000,000	0	+ 2,000,000
	(顕彰碑献花費)	500,000	500,000	0
	総会/講演会費	1,500,000	1,500,000	0
	期生会支援費 (47期生助成)	100,000	100,000	0
	(50期生発会)	100,000	100,000	0
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
	安全保障講座助成金	100,000		+ 100,000
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0
	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0
出	複写機賃料	350,000	350,000	0
	電話/FAX維持費	400,000	400,000	0
	小原台事務局運営費	100,000	100,000	0
	代議員会運営費	700,000	700,000	0
	機関誌発行費	4,000,000	3,300,000	+ 700,000
	同窓会名簿維持費	250,000	250,000	0
	記念品作成	500,000	0	+ 500,000
	会長運営費	500,000	400,000	+ 100,000
	事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	0
	本部事務局室賃料	2,900,000	2,900,000	0
	事 務 費	350,000	350,000	0
	通 信 費	150,000	150,000	0
	交 通 費	400,000	400,000	0
	会 議 費	200,000	200,000	0
	予 備 費	1,500,000	1,500,000	0
	支 出 計	27,650,000	21,600,000	+ 6,050,000

平成12年度 防衛大学校同窓会決算報告

平成13年3月31日

(単位:円)

	項 目	予 算	実 績	備 考
収入	会 費 (44期生他)	19,740,000	11,013,960	会費納入率47%
	預貯金利息	330,000	316,660	
	同窓会名簿売上金	未定	30,000	前年度広告代
	積立金からの繰り入れ	2,340,000	7,026,330	会費減に伴う繰入増
支 出	収 入 計	22,410,000	18,386,950	
	事業計画の推進 (現職・OB会員交流)	1,000,000	507,720	
	(同窓会主催親睦交流会)	300,000	339,726	
	(相談窓口の設置)	50,000	0	
	(ホームカミングデー)	300,000	663,570	参加員数の大幅増
	(会員の出版支援)	50,000	0	
	(防大卒業留学生との連携)	700,000	994,104	タイ支部設立支援
	(全国的な情報網の整備)	50,000	28,980	
	総会/講演会費	2,500,000	1,249,103	講演会講師・部内現職
	期生会支援費 (48期生会)	100,000	100,420	
	(45期生会)	100,000	100,420	
	校友会対外活動助成費	1,000,000	1,000,210	
	開校記念祭助成費	2,000,000	1,790,670	
	顕彰碑献花費	600,000	300,210	
	慶 弔 費 (供花、弔電)	350,000	615,231	物故会員の増
	職員定年退職者記念品費	100,000	160,177	定年退職者の増
	複写機賃料	210,000	344,550	複写機の更新
	電話/FAX維持費	500,000	252,061	
	小原台事務局運営費	100,000	0	
	代議員会運営費	700,000	792,086	臨時代議員会の実施
出	機関誌発行費	3,300,000	2,874,590	
	同窓会名簿維持費	200,000	2,140	
	会長運営費	500,000	429,620	
	事務局雇用費	2,000,000	2,000,000	
	本部事務局室賃料	2,800,000	2,835,831	
	事 務 費	350,000	351,724	
	通 信 費	150,000	145,760	
	交 通 費	400,000	308,510	
	会 議 費	500,000	99,327	
	予 備 費	1,500,000	100,210	安保講座賛助金
	50周年記念事業委員会	0	0	
	小 計	22,410,000	18,386,950	
支 出 計	次年度繰越		0	
	支 出 計		18,386,950	

同窓会総会及び50周年記念行事の御案内

平成13年度同窓会総会等及び平成14年度防大創立50周年同窓会記念行事が下記のとおり開催されます。御出席を賜りたく御案内申し上げます。

記

平成13年度 同窓会総会等
1 日 時 平成14年3月1日(金) 16:00～20:00
ア、総会 16:00～17:30
イ、講演会 17:30～18:30
ウ、懇親会 18:30～20:00

2 場 所 グランドヒル市ヶ谷 (TEL03-3268-0111)
東京都新宿区市谷本村町4-1

3 懇親会費 4,000円

平成14年度 防大創立50周年同窓会記念行事(案)

1 日 時 平成14年11月16日(土) 11:00～19:00
ア、顕彰碑献花式 11:00～12:00
イ、記念講演会 13:00～15:00
(講演者 三浦 朱門 氏)

ウ、記念ビデオ試写会 15:00～16:00

エ、記念祝賀会 17:00～19:00

オ、モニュメント製作過程の展示及び記念マーチの披露等

2 場 所 防衛大学校(記念講堂等)

3 連絡先

防大同窓会本部事務局 TEL/FAX(局 線): 03-3351-8910

TEL/FAX(専用線): 8-6-28895

総会に参加される方及び50周年記念行事に参加を予定される方は、同封の返信用葉書にて平成14年2月1日(金)必着でお申し込み下さい。

(※総会等及び50周年記念行事ともに欠席の方は、返送不要です。)

尚、50周年記念行事については、退官会員には平成14年7月頃、現職会員には同年8月頃、再度ご案内を送付します。

平成13年度同窓会行事

平成13年度同窓会行事が次のとおり実施されました。

●11月17日(土) 顕彰碑献花式

(於 防衛大学校)

同窓会長が執行者となり、学校長はじめ学校職員と同窓生の各期代表者の参列を得て、同窓の英霊87柱の御冥福をお祈り申し上げます。

●12月7日(金) 代議員会

(於 グランドヒル市ヶ谷)

下記議案が承認されました。

- 1 平成12年度事業報告、決算報告及び財産目録
- 2 平成13年度事業報告
- 3 平成14年度事業計画及び予算案
- 4 ペイオフ制度への対応
- 5 防大創立50周年同窓会記念事業実施計画案
- 6 来年度の人事案

本部・事務局からのお知らせ

本部事務局					会 理					副 副 会 長				
総務局長	事務局長	経理部長	広報部長	人事部長	副 会 長	計 監	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同
佐 長	野 長	川 長	杉 長	小 長	阿 博	松 充	君 信	利 宏	菅 博	菅 博	菅 博	菅 博	菅 博	菅 博
最上 清隆	高橋 邦彦	根岸 勝利	森 寛太郎	浅野 剛	中尾 誠三	伊藤 文夫	杉本 光	松井 甲子雄	川名 正浩	菅 博	菅 博	菅 博	菅 博	菅 博
21(海)	14(陸)	5(海)	3(空)	2(空)	17(海)	14(陸)	16(空)	7(海)	6(陸)	5(陸)	13(陸)	4(空)	3(陸)	2(海)

平成12年度同窓会本部役員

地域支部等役員(平成13年末現在)					総 務 部					企 業 部				
支部長	支部長	支部長	支部長	支部長	総 務 部	企 業 部	企 業 部	企 業 部	企 業 部	企 業 部	企 業 部	企 業 部	企 業 部	企 業 部
北海道地域支部	東北地域支部	東部地域支部	中部地域支部	西部地域支部	林 佐光	佐 志	宇 仁	内 田	川 原	野 崎	古 川	守 屋	武 宮	慶 喜
支部長: 櫻山 貢(3・陸) 場所: 札幌市	支部長: 阿部 賢吉(3・陸) 場所: 仙台市	支部長: 中野 純人(2・陸) 場所: 福岡市	支部長: 小西 忠(1・海) 場所: 那覇市	支部長: 江戸 満(1・陸) 場所: 名古屋市	支部長: 牧 次郎(2・海) 場所: 大阪市	支部長: 松浦 育郎(1・陸) 場所: 広島市	支部長: 岡山 清(1・陸) 場所: 熊本市	支部長: 竹之下 憲弘(1・陸) 場所: 西都市	支部長: 西岡 清(2・陸) 場所: 基山町	支部長: 稲月 眺司(2・陸) 場所: 別府市	支部長: 北井上一則(5・陸) 場所: 鹿児島市	支部長: 菅沼 祐亨(1・陸) 場所: 市ヶ谷	支部長: 菅沼 祐亨(1・陸) 場所: 市ヶ谷	支部長: 菅沼 祐亨(1・陸) 場所: 市ヶ谷
5(海)	3(空)	2(空)	17(海)	14(陸)	16(空)	7(海)	6(陸)	5(陸)	13(陸)	4(空)	3(陸)	2(海)	21(海)	14(陸)